

# 富山県の旧制学校・新制高等学校・特別支援学校校歌をつくった人たち ～作詞者及び作曲者の観点から～

The Lyrics Writers and the Composers  
that made the pre-World War II Old System School Songs  
and the New System High School Songs  
and the Special Support School Songs  
in Toyama Prefecture

堀江英一  
HORIE Hidekazu

『富山県の小学校校歌をつくった人たち～作詞者及び作曲者の観点から～』（2014年、富山国際大学子ども育成学部研究紀要第5巻）、『富山県の中学校校歌をつくった人たち～作詞者及び作曲者の観点から』（2016年、富山国際大学子ども育成学部研究紀要第7巻）に続き、小澤達三『富山県校歌全集』に基づいた富山県内の旧制学校、新制高等学校、特別支援学校校歌の作詞・作曲者の一覧を作成すると共に、作詞者及び作曲者について調査することができた。一覧は、作詞・作曲者の出身地や経歴とともに、統合された学校、休校になった学校が一目でわかるようにした。作成の過程で、前掲書に未掲載の学校、制定年等の訂正、新たに判明した作詞・作曲者名も含めることができた。

キーワード 富山県 旧制学校 高等学校 特別支援学校 校歌 作詞者 作曲者

## I 問題の所在

富山県内の小中学校の校歌に関して、2014年及び2015年の富山国際大学子ども育成学部研究紀要（5巻及び7巻）の中で、作詞者と作曲者の観点からその特徴を明らかにした。今回、旧制学校、新制高等学校、特別支援学校について、同じ観点からその特徴を考察することで、富山県の学校全体の校歌の特徴についてその概要を示すことができると考えた。

富山県の校歌に関して、次の資料がある。

### ◆小澤達三『富山県校歌全集』（1979年、パラマウント社）

長年県内の小学校教育に携わり、魚津市立大町小学校長を最後に退任した小澤達三によるもので、当時の小学校・中学校・高等学校・短期大学・大学の校歌をすべて楽譜つきで収録した労作

である。全国的にも珍しく価値が高い。付録の『余滴』には、校歌に関する逸話、著者の校歌観、主な作曲者の作風分析、作詞者と作曲者のプロフィール等が掲載されている。

◆富山県ひとづくり財団・富山県教育記念館編『校名・校章・校歌と教育への期待』（2010年、富山県ひとづくり財団、未出版）

県内の小学校・中学校・高等学校について、沿革及び校名・校章・校歌に込められた願いを各校1ページにまとめたものである。当初は研究紀要として計画されたものだったが、音楽著作権の問題があって未出版である。筆者は編集委員の1人だった。

◆チューリップテレビ編『越中人譚第63号「校歌」』（2003年、チューリップテレビ）

富山県の校歌を数多く作詞した大島文雄、『富山県校歌全集』を著した小澤達三、新湊高等学校の校歌を作詞した詩人三浦孝之助を特集している。

◆大島文雄先生追想録刊行会編『大島文雄先生追想録』（1992年、岩波ブックセンター）

富山県内の校歌を数多く作詞した大島文雄について、ゆかりのある人たちによる追想と、作詞した校歌年表が収録されている。

◆立山町教育センター・立山区域小学校教育協議会『立山区域小・中学校校歌集』（1991年）

立山町の小中学校の校歌が、ピアノ伴奏つきの楽譜で収録されている。統合や休校になって歌われなくなった校歌も、歌唱パートのみ掲載されている。

◆氷見市教育委員会『氷見のうた』（1995年）

氷見の民謡、わらべ唄、校歌・園歌が収録されている。すべて歌唱パートのみの楽譜である。統合や休校になって歌われなくなった校歌も掲載されている。

◆八尾町教育委員会『八尾区域校歌集』（不詳、未出版）

八尾区域の小中学校の校歌を楽譜で収録している。謄写版印刷でファイルに綴じられたものである。

◆富山県高等学校教育研究会音楽部会編『富山県高等学校校歌全集』（2010年、未出版）

富山県内の高等学校・特別支援学校の校歌をすべてピアノ伴奏つきの楽譜で収録している。筆者が中心となり編集・浄書したものである。音楽著作権の問題があって未出版だが、PDF版を収録したCDが各校に配布された。

◆佐藤進『校歌・園歌作曲集』（2015年）

富山市内の中学校音楽科教諭を長年務め、中学校長を歴任した佐藤進による校歌・園歌集である。すべてピアノ伴奏つきの楽譜で収録されている。

◆早月川風土記の会『早月川風土記』（2008年）

劔岳を源として富山湾に注ぎ、古くは大伴家持によって万葉集にも歌われた早月川が歌詞に出てくる校歌が歌詞のみで収録されている。

また、富山県内の校歌を収録したCDには次のようなものがある。

◆『八尾小学校に伝わる12の校歌』

旧婦負郡八尾町・現富山市の八尾小学校は、統廃合を繰り返した結果、12校の校歌が伝えられている。そのすべてを声楽家による独唱と子どもたちの斉唱で収録している。歌詞及び楽譜はない。

◆『滑川市小学校中学校校歌集』（サンビデオ）

滑川市内小中学校の校歌を子どもたちの歌唱で収録している。歌詞カードが添付されている。

◆『創立百周年記念 富山県立高岡中学校・高岡高等学校校歌・応援歌集』（1998年）

県立旧制高岡中学校・高岡高等学校の創立 100 周年を記念して制作された。旧制高岡中学校の 2 種類の校歌、応援歌、高岡高等学校校歌、高岡高等学校創立 70 周年記念祝典行進曲が収録されている。高岡高等学校校歌の作曲者・團伊玖磨が編曲した祝典行進曲は、團伊玖磨指揮読売日本交響楽団の演奏である。

これらの資料は、大変貴重なものであるが、県内の校歌についてまとめた著作は『富山県校歌全集』以降出版されていない。

現在、少子化傾向に伴って学校の統廃合が加速しつつある。こうした状況下で、歌われなくなった校歌、新たに制定された校歌が増えつつある。歌われなくなった校歌は、楽譜とともに姿を消していく運命にある。そして、それらの校歌の楽譜を保存しようとする動きも県内では見られないのが現状である。

したがって、今この時点で、県内の校歌に関する情報をできる限り調査し整理しておく必要がある。

小学校、中学校、高等学校、特別支援学校、旧制学校の校歌の作詞・作曲者についてまとめた文献は、今まで存在しない。今回、旧制学校、新制高等学校、特別支援学校の校歌の作詞・作曲者についてまとめることができた。今後の校歌研究にいささかでも役立つことを願うものである。

## II 研究の方法

①小澤達三『富山県校歌全集』（1979年、パラマウント社）及び富山県ひとづくり財団・富山県教育記念館編『校名・校章・校歌と教育への期待』（2010年、富山県ひとづくり財団、未出版）に基づき、校歌の作詞者、作曲者、制定年を明記した富山県の旧制学校、新制高等学校、特別支援学校一覧を作成する。一覧は、各学校の統廃合状況がわかるようにする。

②作詞者及び作曲者について出身地や経歴を含めて一覧にし、どのような人たちが校歌をつくったのかその特徴を明らかにする。

## III 富山県の旧制学校・新制高等学校・特別支援学校の校歌をつくった人たち

### 1. 旧制学校

#### (1) 校歌の制定状況

わが国で最古の校歌は、1878（明 11）年に制定された東京女子師範学校の校歌（昭憲皇后作歌／東儀季熙作曲）とされる。1891（明 24）年に、『文部省令第四号 小学校祝日大祭日儀式規定』によって、全国一律に紀元節や天長節などを祝う儀式が小学校で行われるようになったが、儀式で歌われる唱歌については明確な規定がなかった。同年、『文部省訓令第二号』によって、祝日に歌う歌として、『君が代』『勅語奉答』『一月一日』など 8 曲が定められ、これ以外の曲を歌う場合は文部大臣の認可を必要とするようになった。これが認可制になったのは、1894（明 27）年の『文部省訓令第七号』である。そこには、「小学校ニ於テ唱歌用ニ供スル歌詞及楽譜ハ

本大臣ノ検定ヲ経タル小学校教科用図書中ニ在ルモノ又ハ文部省ノ撰定ニ係ルモノ及地方長官ニ於テ本大臣ノ認可ヲ受ケタルモノノ外ハ採用セシムヘカラス但他ノ地方長官ニ於テ一旦本大臣ノ認可ヲ経タルモノハ此ノ限ニ在ラス」(文部大臣 西園寺公望、官報第 3452 号)とあり、小学校で歌う唱歌はすべて文部省の認可を受けなくてはならなくなった。<sup>1</sup>

しかし、1911(明 44)年から刊行された『尋常小学唱歌』が登場すると、実質的には校歌認可のための制度になった。<sup>2</sup> 渡辺裕は、中学校以上の学校で校歌制定の動きが広がるのは、大正期(1913~1926年)になってからで、「中学校、女学校、実業学校などにも同種の規定が適用されるようになるのは、戦時下の国民精神総動員体制が強化された 1939(昭 14)年になってから」<sup>3</sup>とする。さらに、実際に認可が行われていたのは一部の道府県であり、上級学校で校歌が普及した背景には、「国民歌謡」として山田耕筰や信時潔といった中央の作曲家たちが、校歌作曲を重要な仕事と位置付けていたことがあるとする。<sup>4</sup>

富山県内の旧制学校の校歌の制定時期を見ると、記録から辿ることができる最古の校歌は、富山県工芸学校(現高岡工芸高)のもので、1894(明 27)年に制定されている。まさに、『文部省訓令第七号』が出された年であり、校種は違うとはいえ興味深い。作詞は陸軍士官学校教官で上智大学講師を務めた友田宣剛、作曲は作曲家で日本教育音楽協会初代会長を務めた小山作之助である。

旧制学校の校歌を制定年順に並べると、次のようになる。( )は作詞者/作曲者である。

- 1894(明 27)年 富山県工芸学校(友田宣剛/小山作之助)※現高岡工芸高  
 1908(明 41)年 市立富山商業学校(池辺義象/楠美恩三郎)※現富山商業高  
 1910(明 43)年 富山中学校(古竹熊治・大日方退蔵/古瀬紋吉)※現富山高  
 県立薬学専門学校(相馬御風/小林礼)※現富山大学薬学部  
 1911(明 44)年 高岡中学校(富田健助/田村喜作)※現高岡高  
 1921(大 10)年 魚津中学校(竹内保治/福井直秋)※現魚津高  
 神通中学校(不詳/不詳)<sup>5</sup> ※現富山中部高  
 1923(大 12)年 魚津高等女学校(松本勝太郎/福井直秋)※魚津女子高→現魚津高  
 中新農業学校(土井晚翠/岡野貞一)※現上市高  
 富山高等女学校(折口信夫/岡野貞一)※富山女子高→現富山いずみ高  
 小杉農業公民学校(相馬御風/福井直秋)※現小杉高  
 県立師範学校(古屋利之/荒木得三)※現富山大学人間発達科学部  
 1924(大 13)年 福野農学校(倉橋惣三/萩原英一)※現南砺福野高  
 1926(大 15)年 氷見高等女学校(蘆澤正中/不詳)※現氷見高  
 石動高等女学校(大村正次/宇佐見太郎)※現石動高

<sup>1</sup> 折橋昭彦『校歌の風景—中越地区小中校歌論考—増補版』(2006年、野島出版)、20~21p

<sup>2</sup> 渡辺裕『歌う国民 唱歌、校歌、うたごえ』(中公新書 2075、2010年、中央公論社)より

<sup>3</sup> 前掲書、146p

<sup>4</sup> 前掲書、147~158p

<sup>5</sup> 富山新聞社報道局『清き神通の流れに』(1985年、富山新聞社) 34pには「校歌の作詩は、当時教頭だった広幸亮三(修身、国漢)だといわれ、作曲は広幸の富山師範時代の友人だった某教師と伝聞されるが、今に残るあかしはない」とある。

- 砺波高等女学校（芳賀矢一／岡野貞一）※現砺波高
- 1927（昭2）年 高岡高等女学校（高野辰之／岡野貞一）※高岡女子高→現高岡西高
- 1928（昭3）年 高岡商業学校（相馬御風／梁田貞）※現高岡商業高（現行と同曲）  
町立戸出実科高等女学校（鴻巣盛広／岡野貞一）※戸出女子高（廃校）
- 1929（昭4）年 伏木商業学校（笹川祥蔵／福井直秋）※現伏木高  
氷見中学校（古山宗一／福井直秋）※現氷見高  
高岡高等商業学校（相馬御風／弘田龍太郎）※現富山大学経済学部
- 1930（昭5）年 婦負農学校（相馬御風／片山穎太郎）※現富山西高（現行と同曲）  
射水中学校（大坪国益／関本駒之助）※現新湊高
- 1931（昭6）年 砺波中学校（吉波彦作／片山穎太郎）※現砺波高
- 1932（昭7）年 上市実科高等女学校（藤田健次／平岡均之）※現上市高  
福光高等女学校（第1回卒業生／弘田龍太郎）※南砺福光高  
県立商船学校（伏脇俊岩／福井直秋）※現富山高専射水キャンパス
- 1933（昭8）年 高岡中学校（相馬御風／岡野貞一）※現高岡高
- 1934（昭9）年 市立高岡高等女学校（與謝野晶子／辻順治）※現高岡高
- 1937（昭14）年 滑川高等女学校（高柳林太郎／福井直秋）※現滑川高
- 1939（昭16）年 魚津実業学校（相馬御風／乗杉嘉寿）※現魚津高
- 1940（昭17）年 三日市農業学校（吉沢庄作／福井直秋）※現桜井高  
新湊高等女学校（相馬御風／弘田龍太郎）※現新湊高
- 1944（昭21）年 泊高等女学校（田中覚秀／田中覚秀）※現泊高

また、制定年不詳の校歌は、学校の存続期間から制定時期をある程度推定することができる。

- 1911（明44）年～1926（大15） 高岡実科高等女学校（不詳／不詳）※現高岡高
- 1914（大3）年～1925（大14） 氷見高等女学校（佐藤惣之助／橋本国彦）※現氷見高
- 1916（大5）年～1938（昭13） 市立富山工業学校（相馬御風／山田耕筰）※現富山工業高
- 1922（大11）年～1947（昭22） 入善農学校〔甲種・乙種〕（不詳／中田章）※現入善高
- 1924（大13）年～1949（昭24） 富山高等学校※現富山大学人文学部  
第一校歌（相馬御風／小松耕輔）  
第二校歌（渡辺年応／小松耕輔）
- 1924（大13）年～1944（昭20） 滑川商業学校（池館速雲／名和君代）※現滑川高
- 1927（昭2）年～1948（昭23） 富山薬学校（相馬御風／中山晋平）※現富山北部高
- 1935（昭10）年～1943（昭19） 滑川薬業学校（高見裕之／川原真之）※現滑川高
- 1936（昭11）年～1939（昭14） 東岩瀬商業学校（不詳／不詳）※現富山北部高
- 1939（昭14）年～1947（昭22） 藤園高等女学校（大谷嬉子／山田耕筰）※現龍谷富山高
- 1939（昭14）年～1949（昭24） 県立富山工業学校（土井晚翠／永井律子）※現富山工業高
- 1942（昭17）年～1947（昭22） 水橋商業学校（相馬御風／不詳）※現滑川高
- 1944（昭19）年～1947（昭22） 八尾高等女学校（清水徳義／白川薫）※現八尾高

これを見ると、富山県内の旧制学校の校歌は、明治の終わりに富山中学校と高岡中学校という県内を代表する中学校の校歌が制定され、以下大正後期から昭和前期にかけて校歌制定の動きが

広がったことがわかる。

## (2) 歌詞の傾向

旧制学校の場合、男子は中学校へ、女子は高等女学校へ進学するきまりになっていたため、それぞれの校風に合わせた校歌が作られている。

旧制中学校の校歌は、質実剛健、勇猛果敢、不屈の精神といった、当時求められた理想の日本男子像が謳われているものが多い。

富山中学校

「名も立山の朝日影 その嵩高を仰ぎみよ」  
「昼夜よどまぬ神通の 深き心をくみて知れ」  
「知徳を磨き体を練り 身を立て国に報ゆべき」  
「堅忍不拔の盾を持ち 奮励努力の剣をとり」

射水中学校

「土節に堪えし高き香を かざしに挿さむ野の菊を」  
「吹雪も風も五年の 学びの園の若き日日 唯一筋にいそしみて」  
「いざ歌わん 文武の学の意気の歌」

また、こうした理想の男子像を富山平野の山河になぞらえたものも多い。

たとえば、砺波中学校の校歌は、絶えることなく富山湾に注ぐ雄神川（庄川）姿を模範として希望の岸に辿り着く大切さを謳っている。

「碧流雄神水清く  
波澎湃の北海に  
注ぐ不断の努力こそ  
希望の岸に漕ぎ行かむ  
吾等の強き舵なれや」

氷見中学校の校歌は、アルプスの姿に若き生命の理想を、有磯の海の灘の浦に深い学びへの決意を謳っている。

「霧晴れ渡る朝の海  
波の上遠きアルプスの  
雄々しき姿打仰ぎ 若き生命をうたはなむ」  
「限りもなみの有磯海  
波寄せかへる灘の浦  
深き思をひそめつつ 学びの業にいそしまむ」

旧制高等女学校の校歌は、良妻賢母など当時の日本女性に求められた理想像を描いた優美な歌詞が多く、旧制中学校の校歌と対照的である。

高岡高等女学校の校歌は、長野県最初の文学博士で文部省唱歌の数々を作詞した高野辰之による格調高い歌詞をもつ。

「霞こめたる桜花 底ににほひをつつむごと  
風に任する青柳の なびかぬ根をばもてるごと  
おとめ我等は世に立たん やさしく堅くいさぎよく」

「朝夕仰ぐ二上の 山の姿に襟正し  
射水の川のにごりなき 鏡に心うつしつ  
おとめ我等は世に立たん 穏しく清く新しく」  
「かの日の影の暖めて 万の物をいつくしみ  
かの春雨のうるほして 万の物を生ふすごと  
おとめ我等は世に立たん なさけと愛とまこともて」<sup>6</sup>

富山高等女学校の校歌は、民俗学者、国文学者として名高い折口信夫によるもので、立山連峰や売比川（神通川）の姿に日本婦人としての理想像を見出している。

「雲居に見ゆる立の嶺 いくへたゝめる山のはの  
そゝる姿と澄む空を やまとをみな的心とし  
たてゝすゝまむいどともに」  
「ゆふ波光る売比川の 瀬々になごめる水のおと  
目路うちかすむ川上や 遠き理想に生くる身の  
こよなき幸をたたへなむ」

農学校や薬業学校の校歌は、鍬、鋤、土、薬など、その産業を象徴する語句がよく見られる。工業学校や商業学校の校歌には、そうした特徴はあまり見られない。

三日市農学校

「土の香薫る美し畑」

福野農学校

「土に親しむ若人の つきぬ生命を君知るや」

郡立氷見農学校

「われらが鋤をにぎるとき 千里の広野は開かれて」

上市農林学校

「邦国の富を増すべき鍬の刃を之に加へて」

小杉農業公民学校

「耕す鍬の一ふりに こもる至誠ぞわが生命」

富山市立薬業学校

「薬都富山の誉こそ」

「富山薬の効験に 病める人々救ひつつ」

「薬神常に護るなり」

旧制高等学校、師範学校の校歌は、学びの決意を格調高く示したものが多い。

富山高等学校 第一校歌

「若き学徒の胸に湧く 清き思ひを誰か知る」

<sup>6</sup> 作曲は岡野貞一だが、「我等世に立たん」の部分は、文部省唱歌『我は海の子』（1910年、作詞作曲者不詳）の旋律と同じである。作曲年は1927（昭2）年である。文部省の唱歌編纂委員だった岡野が、他の編纂委員の旋律を使用するとは考えがたい。『我は海の子』の作曲者は岡野貞一という可能性がある。

「若き我等が担ふなる 使命は重しいぎ共に」

富山高等学校 第二校歌

「大いなれ 天地の如 あゝ我等 あゝ我等」

「力あれ わだつみの如 あゝ我等 あゝ我等」

「光あれ シリアスの如 あゝ我等 あゝ我等」

富山師範学校

「燦たる文化を東に生まん」

「学徒をはぐくみ教えの道に」

「北方教育ここに生れん いぎや立てよ 富山師範師範」

### (3) 作詞者

富山県内の旧制学校の校歌の作詞者は、学校関係者及び教育関係者と著名な詩人や歌人とに分けられる。

#### ア. 教育関係者

富山中学校（1910／明 43 年）の作詞は吉竹熊治と大日方退蔵で、ともに富山中学校の教員である。高岡中学校（1911／明 43 年）の作詞は田村喜作で、当時の校長である。このように、この頃は校長や教員が作詞する場合は結構あった。

教員が作詞しているものは、氷見高等女学校の蘆澤正中（当時の教員）、石動高等女学校の太村正次（高岡中学校教員）、氷見中学校の古山宗一（当時の教員）、射水中学校の大坪国益（県内中学校教員）、砺波中学校の吉波彦作（当時の教員、後に砺波中学校長）、県立商船学校の伏脇俊岩（高等小・高等女学校長歴任）、滑川高等女学校の高柳林太郎（当時の教員、後に福光高等女学校長）、三日市農業学校の吉沢庄作（俳人・魚津中学校教員）、泊中学校の田中覚秀（当時の教諭、作曲も行う）、滑川商業学校の池館速雲（水橋中学校初代校長、後に水橋町教育長）である。

当時の旧制中学校や高等女学校の教員になるには、高等師範学校などの官立教員養成機関、文部大臣の指定した官立学校（指定学校）、文部大臣の許可を受けた学校（許可学校）を卒業するか、試験検定（文検）に合格するかの方法があった。<sup>7</sup> 富山県師範学校を例にとると、「師範学校は、学資のほとんどが公費でまかなわれ、食費を初め、小倉の制服、帽子、靴、靴下、シャツ等にいたるまですべて支給されていた。（中略）このような数々の恩典を持つ学校であったため、希望するものはだれでも入学できるというものではなかった。県内の各都市から推せんされた者にかぎり入学できるという厳しい制限がなされて」<sup>8</sup>おり、「当時の生徒達は、師範学校に入学したといっても、これはあくまで仮入学であった。第 1 学期の試験で、どの課目 1 つでも不合格があれば、直ちに退学というきびしい制度がひかれていた。」<sup>9</sup>

こうした厳しい学業生活を経た師範学校出身の教員は、校歌の作詞に必要な十分な知識と教養を備えていたはずである。

校歌に用いられている語句を見ると、現代の感覚からは難解と思われるものが多く、作詞した教員の教養の高さが感じられる。

<sup>7</sup> 明治 17 年『中学校師範学校免許規定』、明治 33 年『教員免許令』による。

<sup>8</sup> 福井直秋伝刊行会『福井直秋伝』（1969 年、同刊行会）、31p

<sup>9</sup> 前掲書、59p



富山中学校

北澎湃の波 自疆不息 天の寵児 堅忍不拔の盾 浮華の風潮 大至剛の活気

射水中学校

垂天の翼 蒼茫辿る野 国のまほら 健児等五百菊葉

砺波中学校

碧流 峻嶺 波澎湃の北海 向上一路 常磐の森 など

大学の教員が作詞している例は、福野農学校の倉橋惣三（お茶の水女子大学教授・日本保育学会会長）、砺波高等女学校の芳賀矢一（東京大学名誉教授・國學院大学長）、戸出実科高等女学校の鴻巣盛広（第四高等学校教授）が挙げられる。

## イ. 詩人・歌人

### a. 相馬御風

相馬御風は、1883（明 16）年に新潟県糸魚川で生まれ、1950（昭 25）年に死去した歌人・詩人・翻訳家であり、早稲田大学校歌をはじめとして膨大な数の校歌を作詞している。糸魚川歴史民俗資料館《相馬御風記念館》によると、新潟県内だけで 144 校、新潟県外で 63 校もの校歌を作詞している。<sup>10</sup> 新潟県外で最も数が多いのは富山県で、17 校である。これらの学校を制定順に示す。（ ）は作曲者である。

1907(明 40)年	24 歳	早稲田大学（東儀鉄笛）
1922(大 11)年	39 歳	『春よ来い』（弘田龍太郎）
1923(大 12)年	40 歳	旧射水郡小杉町・現射水市・小杉農業公民学校（福井直秋） ※現小杉高
1928(昭 3)年	45 歳	高岡市・高岡商業学校（梁田貞）※現高岡商業高（現行と同曲）
1929(昭 4)年	46 歳	高岡市・高岡高等商業学校（弘田龍太郎）※現富山大学経済学部
1930(昭 5)年	47 歳	旧婦負郡婦中町・現富山市・婦負農学校（片山頴太郎） ※現富山西高（現行と同曲）
1931(昭 6)年	48 歳	砺波市・砺波中学校（吉波彦作・相馬御風加筆／片山頴太郎） ※現砺波高
1933(昭 8)年	50 歳	高岡市・高岡中学校（岡野貞一）※現高岡高
1939(昭 14)年	56 歳	魚津市・魚津実業学校（乗杉嘉寿）※現魚津高
1940(昭 15)年	57 歳	新湊市・現射水市・新湊高等女学校（弘田龍太郎）※現新湊高 黒部市・三日市農業学校※（吉沢庄作・相馬御風加筆／福井直秋） ※現桜井高
1946(昭 21)年	63 歳	新湊市・現射水市・海老江国民学校（岡野貞一）※現東明小 新湊市・現射水市・新湊国民学校（信時潔） ※現新湊小（現行と同曲）
1948(昭 23)年	65 歳	東砺波郡城端町・現南砺市・北野小学校 （西部鳴杜・相馬御風校訂／荒木得三）※現城端小

<sup>10</sup> 糸魚川民俗資料館《相馬御風記念館》『相馬御風作詞曲一覧』（2015 年）

大正期 高岡市・守山尋常小学校（作曲者不詳）※現万葉小  
 不詳 旧婦負郡細入村・現富山市・猪谷小学校（小松耕輔）※現神通碧小  
 富山市・水橋商業学校（不詳）※現滑川市・現滑川高  
 富山市・市立富山工業学校（山田耕筈）※現富山工業高  
 富山市・富山高等学校第一校歌（小松耕輔作曲）  
 ※現富山大学人文学部・理学部  
 富山市・富山薬学校（中山晋平）※現富山大学薬学部  
 富山市・富山薬学専門学校（小林礼作曲）※現富山大学薬学部

相馬御風と交流のあった富山県人について、蛭子健治は、郷倉千靱、須垣久作、豊秋伴次、米澤元健の4人を挙げている。蛭子によると、著名な日本画家として知られる郷倉千靱は、1930（昭和5）年に画家志望だった御風の三男・皓を郷倉の師だった安田靱彦に紹介し、1935（昭和10）年から師事させている。また、戦時物資統制時代に雑誌の印刷用紙不足に苦しんだ御風を全面的に支援したのが、現在のスガキ印刷株式会社の前身である紙店を営んでいた須垣久作だった。<sup>11</sup>

糸魚川歴史民俗資料館《相馬御風記念館》編『相馬御風略年譜』によると、1924（大13）年頃から1931（昭和6）年にかけて、長野、富山、石川県など県外講演の機会が多くなっており<sup>12</sup>、それが縁で作詞依頼が増えたことも考えられる。

富山県の作詞が多い理由は、こうした人とのつながりがもたらした結果かもしれない。

高岡中学校校歌の作詞を相馬御風に依頼したいきさつが『高岡中学・高岡高校百年史』<sup>13</sup>に述べられている。

1911（明治44）年に田村喜作校長が授与した校歌の歌詞が長くて覚えにくく曲調も古いため、昭和初期には歌われなくなっていた。そこで、実際に歌われる親しみやすい校歌を作成することが、1932（昭和7）年の夏季同窓会総会で可決されたとある。学校ではなく、なぜ同窓会なのか不思議であるが、そのような経緯で、翌年4月に井上専敬校長から相馬御風に作詞依頼がなされた。井上校長の本籍が新潟県であったため、なんらかのつながりがあったかもしれないとする。依頼の手紙が糸魚川歴史民俗資料館に残されている。「御願の件は小校の校歌の御作製を御依頼申上度き事に候。（中略）従来の校歌有之候も余り古く相成少々現状に合はぬ点もあり曲譜も今は好まし刈らず（後略）」歌詞は同年6月初めにはできあがり、東京音楽学校の岡野貞一が作曲した。そして同年8月の同窓会総会で披露されている。（歌詞は3番まで）

「白露黄金の玉と散る  
 志貴野が原の朝風に  
 凜たる士気の胸張りて  
 太刀の高嶺を仰ぐ時  
 玲瓏として曇りなき

<sup>11</sup> 蛭子健治「御風と富山一校歌の作詞、交流の人物等」～御風会『会報「洗心」第17号』（2007年5月）

<sup>12</sup> 糸魚川歴史民俗資料館《相馬御風記念館》編『相馬御風略年譜』（2014年）

<sup>13</sup> 富山県立高岡高等学校百年史編集委員会『高岡中学・高岡高校百年史』（1999年、富山県立高岡高等学校創立百周年記念事業後援会）、232p～237p

心を常に保たばや」

相馬御風の作詞は、格調の高さが特徴である。この校歌も、「白露黄金の玉と散る」、「あらしを凌ぎ雪に堪へ」(2番)、「上つ御代より豊かなる文の恵」(2番)など、歌う者が思わず襟を正すような語句が用いられている。

新湊高等女学校の校歌は次のとおりである。(歌詞は3番まで)

「いにしへの寧楽の御代より  
万葉の花かぐわしく  
たぐいなき大和心の  
咲き匂ひ いやつぎつぎに  
栄え来し これのよき地に  
幸ありて 学ぶわれらぞ」

また、魚津実業学校の校歌は、1924(大13)年に当時の東宮殿下(後の昭和天皇)が富山県を行啓した際に西砺波郡石動町にあった御野立所から立山を眺めて詠われた御製が引用されている。

「立山の空に聳ゆる  
雄々しさに ならえとの  
仰せかしこみ ひたすらに  
心も身をも鍛えなむ  
われらは魚實の健児」(歌詞は2番まで)

もとの御製『立山の』は次のとおりである。

「立山の空に聳ゆる雄々しさにならへとぞおもふ御代の姿も」

相馬御風は、自ら作詞するだけでなく、加筆・校訂作業も行っている。県内の校歌で、相馬御風が校訂した学校は3校が判明している。( )は作詞者/作曲者である。

- ・砺波市・砺波中学校(吉波彦作/片山颯太郎)※現砺波高
- ・黒部市・三日市農業学校(吉沢庄作/福井直秋)※現桜井高
- ・東砺波郡城端町・現南砺市・北野小学校(西部鳴杜/荒木得三)※現城端小

富山県立砺波高等学校の『七十年史』に、吉波彦作教諭が作詞の経緯を記している。<sup>14</sup>

「校歌の制定、是は吾が校に於ける随分久しい間の問題であった。(中略)是非とも何かの機会に校歌を制定して欲しい……という熱望が益々盛んになって来た。」

「各自が起稿するということにしたが、さてやって見るとなかなか困難である。(中略)先ず是ならば大体良かろう。然し此案に就いて大家の批評修正を仰がねばならない。それでは誰にお願いしたら適当であろうかと協議してみた。それには富山県の事情又礪波の風光、歴史等に最も通じて居られる彼の相馬御風先生をお願いすることにしようということに一決した。」

「四月下旬、書面を以て相馬先生に大体の御依頼をして、親し御示教に預かりたいとお伺した。先生は快く御承諾下さって、御都合の好い日を知らせて下さった。私は早速歌稿を携えて、先生を糸魚川の邸に訪問した。先生は懇切にお迎え下さった。(中略)先生は再読三読

<sup>14</sup> 七十年史校史編纂委員会『七十年史』(1979年、富山県立砺波高等学校砺波同窓会)、70p

されてから、やはり長すぎるように思う。何とかもう少し短くなくなさるがよかろうと指示せられた。(中略)私の原作の面影を十分残しておいて、そして五句三節に切り詰め、遡勁簡朴の風に修正して下さったので、謂わば瓦礫を変じて金玉に化したようなものであるから、私どもは大いに歓喜したのである。」

#### b. 與謝野晶子

與謝野晶子は、1878（明 11）年に大阪府に生まれ、1942（昭 17）年に東京都で死去した歌人・作家である。1934（昭 9）年に、高岡市立高岡高等女学校（現高岡高）の校歌を作詞している。

「我等の歌はもろともに  
内の理想の叫びなり  
またみづからを励まして  
呼ばはる声ぞいざ歌へ」

「平野のかなた天つ空  
峰を連ぬる立山に  
比べんばかりわれわれも  
明るく高き心あれ」

「桜の馬場に花ひかり  
古城公園 松秀づ  
やさしき花のわれわれも  
身の健やかさ松に似よ」

「高岡市立高女生  
これを我等の誇りとす  
凛々しき今日のよき少女  
輝やく明日の人の母」

太田久夫によると、1933（昭 8）年 11 月 1 日、宇奈月温泉延対寺別館に夫の鉄幹とともに 2 泊し、富山市での講演後、5 日に高岡の延対寺旅館に入り、午後から古城公園を散策し、当時公園内にあった図書館で講演している。また、6 日には県立高岡高等女学校で講演している。

当時、女流詩人として晶子と交流があり、市立高岡高等女学校に勤務していた高松みどり教諭が、同校の校歌の作詞を依頼したという経緯がある。<sup>15</sup> 高岡市中央図書館に、1934（昭 9）年 3 月 2 日付の高松みどり宛の晶子の手紙が収蔵されている。

「啓上  
度々御文下されありがたく存じ候  
私はいつも失礼のみいたし居り候  
雪の中にも御すこやかにいまし候こと何よりもめでたき御ことゝ存じ上げ候

<sup>15</sup> 太田久夫「与謝野夫妻古城公園散歩」～同『続古城の杜 郷土雑纂第四集』（2006 年）、436p～438p

急ごしらへの校歌にほめことばを皆様より頂き候こと恐れ入り候  
 去年見せて頂かざりしならばさぞ作りにくかりしことゝ  
 そのみは校長様の御ことばの如く私もおもひ候  
 辻様より譜を私もいただき候へども一寸ピアノ損じ居り候て まだ 聞きかねて候  
 扇面の文字これにていまに合はば幸ひに候。  
 皆様によるしく御つたへ遊ばされたく候

今秋主人は西へ立ち申  
 私は明日吉野村の梅を見にまゐるやくそくをいたし居り候  
 乱筆おゆるし下されたく候

三月三日 晶子  
 みどり様 御もとに」<sup>16</sup>

手紙からは、高岡市立高等女学校があった大手町そばの古城公園の案内を受けたことが推測される。公園内には桜や松などの樹木が数多く植えられており、歌詞に出てくる桜の馬場は当時あった桜の名所である。実際に目にしなければこうした歌詞は書けなかつたであろう。歌詞は晶子らしい勇壮なもので、他の優美な高等女学校の校歌とは一線を画している。

### c. 土井晩翠

土井晩翠は、1871（明 4）年に宮城県仙台市に生まれ、1952（昭 27）年に死去した詩人・英文学者である。瀧廉太郎が作曲した歌曲『荒城の月』の作詞で知られる。全国の校歌を数多く作詞しており、1923（大 12）年には県立中新農学校の校歌を作詞（岡野貞一作曲）している。また、作詞年は不詳であるが、県立富山工業学校の校歌も作詞（永井律子作曲）している。

土井晩翠が富山とどのような繋がりがあったのか不明であるが、富山県立上市高等学校の『七十年史』に、当時の川村吉太郎教諭が作詞依頼の経緯を明らかにしている。

「初代の森谷校長さんは第二高等学校卒業であり、土井晩翠は二高の先生でした。恩師に対して校歌の作詞を依頼されたのです。本人は来校しなかつたけれど資料が送られました。たしか大正十二年でした。作曲も校長が岡野さんに依頼され、晩翠にお礼のため高岡の銅器が贈られました。」<sup>17</sup>

#### (4) 作曲者

##### ア. 教育関係者

旧制学校の場合、教育関係者の作曲は多くない。

校長や教諭による作曲は、次のとおりである。

1911（明 44）年 高岡中学校 田村喜作（校長）

1929（昭 4）年 伏木商業学校 福井政次（音楽科講師）

<sup>16</sup> 高岡市中央図書館蔵『與謝野晶子から高松みどり宛の手紙』（2004年12月2日、太田久夫氏により原稿起こしされたもの）

<sup>17</sup> 富山県立上市高等学校『七十年史』編集委員会『七十年史』（1989年、富山県立上市高等学校同窓会）、16～17p

1930(昭5)年 射水中学校 関本駒之助(教諭)

師範学校教員による作曲は、次のとおりである。

1910(明43)年 富山中学校 古瀬紋吉(富山女子師範・県立富山高女教諭)

1923(大12)年 富山師範学校 荒木得三(富山師範教諭)

#### a. 古瀬紋吉

旧東砺波郡北般若村(現高岡市)出身の古瀬紋吉は、1910(明治43)年に東京音楽学校甲種師範科を卒業し、同年5月から1913(大正2)年5月まで富山中学校で教鞭を執っている。<sup>18</sup>富山中学校の校歌は、古瀬が赴任した年に作曲されている。

当時の様子について、25回生の高井千尋が「恩師の思い出」と題した回想を『むつみ会報』に寄せていることを『富中富高百年史』が伝えている。

「常に吉竹先生のお宅へ参り短歌を添削していただきましたし、大日方先生には特に親しくしていただき俳句なんかも習いました。大日方先生は非常に豪傑でありまして、御赴任の時には、はおり袴に白たびで弓の半分おれたのを杖についておいでになりました。(中略)国語と漢文の先生で、吉竹先生は同じく国文学者でいらっしゃいましたが、こちらは、まあ柔らかい方の佐々木信綱先生の歌風を受け継いだお方でした。この二人で富山中学の校歌をお作りになり、作曲は古瀬紋吉先生がなさいました。古瀬先生は音楽学校を卒業され、富山の高等女学校の先生になって来られたのです。富山中学には嘱託として音楽を教えておられました。私が二年の時、唱歌というものがあり、オルガンが一脚あって、古瀬先生に教えていただいたのです。」<sup>19</sup>

なお、古瀬紋吉は、和歌山県の高野山とも関係があったようで、和歌山県高野町立高野山中学校の校歌(亀山久雄作詞)、合唱曲『石楠花讃歌』(亀山久雄作詞)、同『追弔和讃』(作詞、作曲は曾我部俊雄)を作曲している。

#### b. 荒木得三

荒木得三は、1891(明24)年3月16日に旧東砺波郡(現南砺市)城端町に生まれた。東京音楽学校を卒業後、1918(大7)年5月に福岡県直方高等女学校教諭、同年10月から高岡高等女学校教諭を務めた。1921(大10)年から1940(昭15)まで県立富山師範学校教諭を務め、1952(昭27)年に死去している。教え子には、川上哲二・川上幸平・川上(黒坂)富治の3兄弟、小澤達三・小澤慎一郎・小澤(牧田)吉隆の3兄弟、大澤(森川)彦治・大澤欽治の兄弟、山崎正俊、廣田宙外がいる。また、ヴァイオリン奏者として活躍すると共に、富山混声合唱団の設立、著名演奏家の招聘など、県内の音楽界を牽引した人物である。富山県観光協会常任理事で、『交響詩「立山」』(黛敏郎)の作曲依頼に貢献した金山方象(中新川郡立山町立立山小学校の校歌を作詞)は富山中学校時代の同級生である。以下に略歴を記す。

1891(明24)年 富山県東砺波郡城端町に生まれる

1907(明40)年 16歳 富山県立富山中学校入学

1910(明43)年 19歳 私立東洋音楽学校入学

<sup>18</sup> 布村安弘『富中回顧録』(1950年、富山県立富山中学同窓会)

<sup>19</sup> 『富中富高百年史』(1985年、富山高等学校創校百周年記念事業後援会)、84p

1912(明 45) 年	21 歳	官立東京音楽学校予科入学
1913(大 2) 年	22 歳	同校本科器楽部 (ヴァイオリン) 入学、クローン氏に師事
1918(大 7) 年	26 歳	福岡県立直方高等女学校教諭
1921(大 10) 年	29 歳	富山県師範学校教諭
1924(大 13) 年	32 歳	富山県立富山中学校兼任講師 (昭和 15 年 12 月まで)
1925(大 14) 年	33 歳	富山県立実業補習学校教員養成所兼任教諭 (昭和 12 年 4 月まで)
1937(昭 12) 年	45 歳	富山県立青年学校教員養成所兼任教諭 (昭和 13 年 8 月まで)
1939(昭 14) 年	47 歳	私立大谷高等女学校兼任講師
1940(昭 15) 年	48 歳	富山県師範学校教諭退任
1941(昭 16) 年	49 歳	富山県立盲啞学校講師 (昭和 27 年 10 月まで) 私立藤園女子学園講師 (昭和 27 年 10 月まで)
1950(昭 25) 年	58 歳	富山県立富山北部高等学校兼任講師 (昭和 27 年 3 月まで) 富山県立雄山高等学校兼任講師 (昭和 27 年 3 月まで)
1952(昭 27) 年	60 歳	富山市大町 35 にて逝去 <sup>20</sup>

富山県教育学窓会編『母校創立百周年記念誌』に、師範学校での荒木得三の姿が回顧されている。

「荒木先生。五年間、ピアノの弾き方も、タクトの持ち方も教えない。そのせいで、何人かの声楽教師が出たはずだが、先生の人生哲学、世界批評は、軽妙で、真味、縹渺淡々として、人間の歩み方の一つの典型を示された。」<sup>21</sup>

「荒木先生のピアノ、コールユーブンゲン即席余興のバイオリン、マンドリン、そして笛、すべて当意即妙。」<sup>22</sup>

「オルガンの横に大変困った顔をした男が立っていた。次から次へとはいつてくる若者が先生の弾くオルガンに合わせて発声している。音階が正しいかどうかで、A、B、Cと採集される。立っていた男はついに悲鳴をあげた。“先生！ボクはいくら人のを聞いても音階が合うことはないのです。生まれつきの音痴なのです。これ以上立っていたって無駄ですからカンニンして下さい。” “ではDだな。出て行ってよろしい。” これは昭和十二年春に行われた富師入試のスナップである。立っていたのは私。試験官は荒木得三先生であった。(中略) 当日私達を音楽学校<sup>23</sup>へ引率されたのは荒木得三先生で、さらに校内を案内していただいたのはハンサムな小沢慎一郎学生であった。入学の翌年昭和十三年のことだった。“小学校の読本を読めないものは一人もいないのに、小学校の楽譜がどうして読めないのだ……” 説教はエンエンと続いている。早くベルがならないかなあ……。首をすくめながらこの時間の終るのをひたすら待っていたのが、卒業実際のピアノ演奏がどうしても出来ない私であっ

<sup>20</sup> 荒木得三先生頌徳会『荒木得三先生』(1956年、富山大学教育学部)

<sup>21</sup> 新村作(昭8卒)「思い出の恩師像」～富山県創立百周年誌編集委員会『母校創立百周年記念誌』(1973年、富山教育学窓会)、167p

<sup>22</sup> 高月宗久(昭10卒)「在学時代の思い出」～前掲書、171p

<sup>23</sup> 東京音楽学校のこと

た。」<sup>24</sup>

当時師範学校の同僚だった古屋利之が次のように回顧している。

「芸術に対する自信といったものは相当強く、どちらかという、鼻っばしの強い方で、事自己の芸術に関しては一步もゆずらぬというところがあった。(中略) こんなところから、氏は時として人と衝突したり、一部の人から反感を持たれるということがないでもなかったようだ。ところが俗に言う合縁寄縁というか馬が合うというか、私には一回もいやな顔を見せたり、不愉快な感じを与えるということがなかった。そして私の作詞したものには喜んで作曲してくれ、富山県の摂政宮殿下奉迎歌を初め『寮舎の夢』『氷見音楽協会歌』、その他小中学校の校歌など、数えあげると、氏とのコンビによるものは十数篇に上るであろう。(中略) 非常に几帳面な一面があって、特に時間に関してはやかましく、いつもお得意の時計を、一つは腕につけ一つはポケットに納めて、その正確さを誇っていた。いつか某駅の時計が何秒か狂っているといって駅長にねぢこんだりしたこともあった。芸術家によく見られる童心も多分に持合せていたようである。何にかぎらず、その頃としては最新の珍しいものをどこからか手に入れて来て喜んでいた。七ツ道具の小刀、ライターなどよく職員室の火鉢のわきで見せびらかされたものである。」<sup>25</sup>

また、友人だった佐伯万象が荒木家の様子を述べている。

「得三君は城端町の出身であの当時厳父荒木文平氏は礪波銀行の頭取で進歩党選出県議員でした。得三君は三男で大体荒木家は厳父始め御兄さん次男さん共に音楽的天才があり、厳父は謡曲に秀でられ殊に朝顔の栽培菊の栽培に特種技術を有せられ朝顔時には何十と云ふ鉢植を並べて毎朝咲き香ふ鉢を広大な御座敷へ陳列され一般外来客を招き観賞され同時に極上の煎茶と朝顔模様の砂糖付おせんべいを呈せられたものです。(中略) 御兄上は一寸御名を忘れましたがこれ亦非常に和曲に上達せられ三絃の如きは『おうさつま』の曲弾込なざる玄人的技能を有せられた尺八横笛に到ってはこれ亦玄人、これに倣ってか御次男も亦尺八が御上手であり其頃は蓄音機としてはローラの蓄音機を米国から得られ自己の吹き込みに依るローラ蓄音機を常に聞かされ自ら興に入ったものでした。」<sup>26</sup>

こうしたエピソードから推察すると、富山県の音楽界を牽引する立場にあった荒木は、芸術家にしばしば見られる強烈な個性の持ち主であり、師範学校においてもユニークな存在だった。荒木が生徒から恐れられながらも慕われていたことは、荒木が死去してから4年後の1956(昭31)年10月13日、当時の教え子たちが記念音楽会を開催するとともに、追想録を出版したことでわかる。

音楽会には、東京芸術大学音楽学部同声会会長・山田耕筰、日本教育音楽協会理事長・井上武士らが祝電を寄せている。プログラムには、荒木雅夫(笛二重奏、荒木得三の三男)、三木乗俊(バリトン独唱)、廣田宙外(バリトン独唱)、金山方象(ヴァイオリン独奏)、大間知千津恵(ピアノ伴奏)、篁ハル(ソプラノ独唱)、皆川澄子(ピアノ伴奏)、大澤欽治(ヴァイオリン独奏)、小澤慎一郎(テノール独唱)、大澤多美子(ピアノ独奏)、黒坂富治(合唱指揮)など、当

<sup>24</sup> 宮崎弘(昭14卒)「音楽と私」～前掲書、180～181p

<sup>25</sup> 古屋利之「荒木氏追憶の断片」～荒木得三先生頌徳会『荒木得三先生』、48p

<sup>26</sup> 佐伯万象「故荒木得三君を偲ぶ」～前掲書、53p



時の富山県の音楽界・教育界の第一線で活躍していた名前が並んでいて壮観である。これらを見ても、荒木がいかに多くの優れた人材を育てたことがわかる。

## イ. 中央楽壇の作曲家等

### a. 岡野貞一

東京音楽学校教授であり、1910（明 43）発行の文部省『尋常小学読本唱歌』や、1911（明 44）年から 1914（大 3）年にかけて発行された文部省『尋常小学唱歌』の編纂委員として中心的役割を果たした岡野貞一は、富山県内に校歌を 10 曲残している。（ ）は作詞者である。

1878(明 11) 年		[鳥取県旧邑美郡・現鳥取市古市に生まれる]
1901(明 34) 年	23 歳	[東京音楽学校講師]
1906(明 39) 年	28 歳	[東京音楽学校助教授]
1907(明 40) 年	29 歳	[文部省唱歌編纂委員]
1917(大 6) 年	39 歳	[文部省唱歌編纂委員解かれる]
1923(大 12) 年	45 歳	中新川郡上市町・中新農業学校（土井晩翠）※現上市高 富山市・富山高等女学校（折口信夫）※現富山いずみ高 [東京音楽学校教授]
1926(大 15) 年	48 歳	砺波市・砺波高等女学校（芳賀矢一）※現となみ野高
1927(昭 2) 年	49 歳	高岡市・高岡高等女学校（高野辰之）※現高岡西高
1928(昭 3) 年	50 歳	高岡市・戸出実科高等女学校（鴻巣盛広）※現高岡南高 高岡市・戸出尋常高等小学校（鴻巣盛広）※現戸出東部小
1931(昭 6) 年	53 歳	旧新湊市・現射水市・海老江国民学校（相馬御風）※現東明小
1932(昭 7) 年	54 歳	[東京音楽学校依願免本官、講師に]
1933(昭 8) 年	55 歳	高岡市・高岡中学校（相馬御風）※現高岡高 砺波市・庄下尋常小学校（根尾長次郎）※現砺波東部小
1940(昭 15) 年	62 歳	砺波市・出町尋常高等小学校（乗杉嘉寿）※現出町小（現行と同曲）
1941(昭 16) 年	63 歳	[日本大学付属病院にて急性肺炎のため死去]

岡野が最初に富山県内の校歌を作曲したのは、文部省唱歌編纂委員の仕事が終わり、東京音楽学校教授に昇任した 1923（大 12）年からである。

東京音楽学校（現東京芸術大学音楽学部）の前身である音楽取調掛が発足したのは、1880（明 13）年のことである。前年、音楽取調掛を拝命した伊澤修二は、取調掛の事業として次の 3 項目を挙げている。

1. 東西二洋の音楽を折衷して新曲を作る事
2. 将来国楽を興すべき人物を養成する事
3. 諸学校に音楽を実施する事<sup>27</sup>

このうち、1.は唱歌教育に必要な唱歌集の編纂、2.は音楽家と音楽教員の養成、3.は唱歌教育の実施に関する事項であり、その根底には「国民の養成」という目的があった。明治当初の日本人は、西洋の概念としての国民の意識はまだなく、自分が生活している藩＝国であった。わが国

<sup>27</sup> 東京芸術大学音楽取調掛研究班『音楽教育設立への軌跡』（1976年、音楽之友社）、はしがき

が西洋列強と比肩できるような近代国家となるためには、「国民」としての意識を民衆に植え付ける必要があった。それに関して渡辺は、「日本を国民国家として出発させるにあたって、そこに属する国民のアイデンティティ意識を作り出すことが最も重要な課題だったということです。そしてまさにそのために音楽が必要とされたのです。(中略) 西洋諸国において音楽が、とりわけ‘国民’が共有できる‘国民音楽’を作り上げ、それを皆で歌うことによって帰属意識や連帯意識を高めていくことが、近代的国民国家を作り上げてゆく上で大きな役割を果たしました。」として、唱歌教育が今日のような美的情操の育成を目的としていなかったと述べている。<sup>28</sup>

したがって、「国民づくり」のためのツールだった唱歌のカテゴリーに属する校歌もまた、集団の一員としての帰属意識を高めるものとして意識されていた。音楽取調掛の伝統を継承した東京音楽学校もまた、そのような「国民づくり」のためにその機能を果たしてきた。文部省『尋常小学唱歌』の編纂に当たったのは、東京音楽学校の教員だった。

委員長 校長 湯原元一  
 作詞委員 教授 宮尾木知佳 吉丸一昌 乙骨三郎 高野辰之  
 楽曲委員 教授 島崎赤太郎 上真行  
 助教授 楠美恩三郎 岡野貞一 南能衛  
 元教授 小山作之助

富山県の校歌もまた、文部省『尋常小学唱歌』の編纂後に制定されたものは、東京音楽学校の教員によるものが多い。当時、東京音楽学校には全国から校歌の作曲依頼があり、教員にその作曲を割り振っていたと推定できる。

富山県立高岡高等学校百年史編集委員会『高岡中学・高岡高校百年史』には、高岡中学校の校歌(岡野貞一作曲)制定に関する記述が見られる。「新校歌は作歌を相馬御風、曲譜は東京音楽学校に依頼された。(中略) 東京音楽学校では、できた詩に『ふるさと』の作曲で有名な岡野貞一が曲をつけた。」<sup>29</sup>

富山県立砺波高等学校の『七十年史』に、砺波中学校の校歌(片山颯太郎東京音楽学校教授作曲)の作詞を担当した吉波彦作教諭(後に校長)が作曲依頼の経緯を記している。

「次には曲譜のことである。誰に依頼してよいか頗る迷って居た。すると音楽の佐々木先生が、  
 ‘東京音楽学校長が本県出身の乗杉先生であるから、此の方に御依頼なさったらよかろう’  
 と話して下さった。是は誠に思いがけないこと、すっかり忘れて居た。私は幸に乗杉先生にはいろいろお願いした関係もあるから、早速書面を以て御伺いをした。乗杉先生は出町の御出身で我が校については十分御承知の方である。事情を打ち明けて経費の乏しいことも申上げて、適当なる先生に作曲の委託をお願いしたのである。乗杉先生は欧洲列国へ視察に赴かれる期日を前にして、非常に多忙であったにも拘わらず、私どもの微衷を御賢察下さいまして、音楽学校の片山颯太郎先生に委嘱せられた。」<sup>30</sup>

砺波中学校の校歌が制定されたのは 1931(昭6)年である。岡野貞一による旧新湊市・現射

<sup>28</sup> 渡辺裕『歌う国民 唱歌、校歌、うたごえ』(中公新書 2075、2010年、中央公論社)、12p

<sup>29</sup> 富山県立高岡高等学校百年史編集委員会『高岡中学・高岡高校百年史』(1999年、富山県立高岡高等学校創立百周年記念事業後援会)、233～234p

<sup>30</sup> 七十年史校史編纂委員会『七十年史』(1979年、県立砺波高等学校砺波同窓会)、71～72p

水市・海老江国民学校（現東明小）の校歌もまた同年に制定されている。

当時、校歌作曲に関しては、土井晩翠作詞の場合のように、個人的に依頼したものもあるようである。砺波高等女学校教諭だった朝倉光子が回想文を残している。

「明治・大正にかけて有名な文学博士芳賀矢一先生に学校からの依頼された校歌の作詞が出来上がりました。ある日、奥田校長先生より、‘貴女の母校の先生に作曲をお願いしてほしい’とお頼みがありました。私は早速、在学中ご指導をいただいた恩師岡野貞一教授にお願い申し上げ、その秋、校歌の作曲が完成したのでございます。」<sup>31</sup>

## b. 福井直秋

福井直秋は、1877（明 10）年富山県越中国中新川郡宮川村字江上村（現富山県中新川郡上市町江上）48 番地に浄土真宗浄誓寺の五男として生まれた。東京音楽学校教授で文部省教科書編纂委員だった高野辰之は 1 歳年長、岡野貞一は 1 歳年少である。わが国最初の作曲家として知られる瀧廉太郎は 2 歳年少で、福井が中新川郡宮川尋常小学校の 3 年だった 1885（明 18）年、富山県師範学校附属尋常小学校 1 年に瀧廉太郎が転入している。後のわが国の音楽界に偉大な足跡を残した 2 人が、互いに会うこともなく富山県内で尋常小学校時代を過ごしていたことは感慨深いものがある。後に福井が東京音楽学校師範科に入学した時、青年教師として福井の前に現れたのが瀧廉太郎であった。福井が瀧廉太郎に学んだ期間は 2 年 6 ヶ月だったが、生涯福井はこの天才音楽家を「師であり、畏友であった」と尊敬の気持ちをもち続けたという。<sup>32</sup>

福井は生涯に膨大な数の音楽理論書、唱歌集を含む声楽関係書、教育関係書を残しており、校歌も多数残されている。福井が作曲した全国の校歌を調査できた範囲内で記す。なお、（ ）は作詞者である。

1877(明 10) 年		[富山県越中国中新川郡宮川村字江上 48 番地に出生]
1883(明 16) 年	06 歳	[中新川郡宮川尋常小学校入学]
1887(明 20) 年	10 歳	[同校卒業、西加積尋常高等小学校入学]
1891(明 24) 年	14 歳	[同校卒業]
1895(明 28) 年	18 歳	[富山県師範学校入学]
1899(明 32) 年	22 歳	[同校卒業、東京音楽学校予科入学]
1900(明 33) 年	23 歳	[同校修了]
1902(明 35) 年	25 歳	[東京音楽学校師範科卒業、富山県師範学校教諭]
1904(明 37) 年	27 歳	[長野県師範学校教諭]
1907(明 40) 年	30 歳	長野県飯田市・飯田尋常高等小学校（浅井冽）※現追手町小
1908(明 41) 年	31 歳	長野県千曲市・更級尋常高等小学校（浅井冽）※現更級小
1909(明 42) 年	32 歳	[長野県師範学校依願退職] [清国浙江省兩級師範同教習 翌年 7 月まで]
1910(明 43) 年	33 歳	[9 月福岡県小倉師範学校教諭嘱託]
1911(明 44) 年	34 歳	[東京府立第三中学校教諭]

<sup>31</sup> 小澤達三『富山県校歌全集 余滴』（1979 年、パラマウント社）、19p

<sup>32</sup> 福井直秋伝記刊行会『福井直秋伝』（1969 年）、47p

			[[尋常小学唱歌伴奏楽譜歌詞評釈・第一学年用・第二学年用]]
1912(明45)年	35歳		[[尋常小学唱歌伴奏楽譜歌詞評釈・第三学年用・第四学年用]]
1913(大2)年	36歳		[[尋常小学唱歌伴奏楽譜歌詞評釈・第五学年用・第六学年用]]
1916(大5)年	39歳	北海道・私立北海女学校(堀沢周安) ※現札幌大谷中・高	
1917(大6)年	40歳	長野県山ノ内町・穂波尋常高等小学校(藤澤倉之助) ※現南小	
1920(大9)年	43歳	[東京府青山師範学校教諭]	
1921(大10)年	44歳	富山県・魚津中学校(竹内保治) ※現魚津高 静岡県・県立志太高等女学校(佐々木信綱) ※現藤枝西高	
1922(大11)年	45歳	[日本教育音楽協会設立、役員就任]	
1923(大12)年	46歳	富山県・魚津高等女学校(松本勝太郎) ※現魚津高 富山県・小杉農業公民学校(相馬御風) ※現小杉高 [[教育音楽]]創刊、関東大震災]	
1925(大14)年	48歳	岐阜県・岐阜商業学校(伊藤武雄) ※現岐阜商業高	
1926(大15)年	49歳	東京府・青山師範学校第一校歌(赤澤隆介) 東京府・青山師範学校第二校歌(葛原しげる) [青山師範学校嘱託]	
1928(昭3)年	51歳	長野県・篠ノ井高等女学校(藤村作) ※現篠ノ井高 [帝国音楽学校4月開校・初代校長、12月退職]	
1929(昭4)年	52歳	富山県・氷見中学校(古山宗一/藤村作校訂) ※現氷見高 東京都江東区・第三大島尋常小学校(武者種彦) ※現第三大島小 東京都大島町・元村尋常高等小学校(巖谷小波) ※現つばき小 長野県・飯山高等女学校(高野辰之) ※現飯山南高 [武蔵野音楽学校認可、初代校長]	
1931(昭6)年	54歳	富山県立山町・五百石尋常高等小学校(古関吉雄) ※現立山中央小 東京都目黒区・中目黒尋常高等小学校(豊田八十代) ※現中目黒小	
1932(昭7)年	55歳	富山県入善町・櫛山尋常高等小学校(前田普羅) ※現桃李小 富山県・県立商船学校(伏脇俊岩) ※現富山高専射水キャンパス [武蔵野音楽専門学校認可]	
1933(昭8)年	56歳	神奈川県・川崎中学校(佐々木信綱) ※現川崎高	
1934(昭9)年	57歳	神奈川県・日本大学第四中(藤村作) ※現日本大学中・高	
1936(昭11)年	59歳	長野県南佐久郡小海町・北牧小海組合立尋常高等小学校 (藤村作) ※現北牧小 福岡県遠賀郡芦屋町・山鹿尋常小学校(八波則吉) ※現山鹿小	
1937(昭12)年	60歳	富山県・滑川高等女学校(高柳林太郎) ※現滑川高	
1939(昭14)年	62歳	東京都新宿区・大久保尋常小学校(水澤澄夫) ※現大久保小 東京都練馬区・上板橋第三尋常小学校(稲葉幹一) ※現旭丘小	
1940(昭15)年	63歳	富山県高岡市伏木町・古府尋常小学校(鴻巣盛広) ※現古府小 富山県黒部市・三日市農業学校(吉沢庄作) ※現桜井高	

- 群馬県・渋川高等女学校（藤村作）※現渋川女子高  
〔長野・新潟・富山方面学事視察〕
- 1944(昭19)年 67歳 〔家族を富山県宮川村に疎開させる〕
- 1945(昭20)年 68歳 〔楽器・楽譜を富山県へ疎開、終戦〕
- 1947(昭22)年 70歳 北海道紋別郡雄武村・雄武国民学校（百田宗治）※現雄武小
- 1948(昭23)年 71歳 富山県立山町・谷口小（柏祐賢）※現休校  
富山県立山町・上東中学校（松永文男）※現雄山中  
〔妻光野逝去〕
- 1949(昭24)年 72歳 富山県滑川市・浜加積小学校（古関吉雄）※現東部小  
富山県滑川市・滑川中学校（浦田三郎）  
富山県滑川市・早月中学校（藤村作）  
富山県富山市・水橋中学校（池館速雲）  
富山県砺波市・庄西中学校（古関吉雄）  
岩手県花巻市・湯本中学校（藤村作）  
山形県山形市・金井中学校（五十嵐晴峰）  
富山県立山町・下段小学校（古関吉雄）  
〔武蔵野音楽大学設立認可〕
- 1950(昭25)年 73歳 富山県富山市・総曲輪小学校（藤村作）※現芝園小  
富山県富山市・和合中学校（大島文雄）  
富山県富山市・呉羽中学校（大島文雄）  
富山県富山市・八尾中学校（大島文雄）
- 1951(昭26)年 74歳 富山県魚津市・西部中学校（前田普羅）  
富山県富山市・山田中学校（大島文雄）  
北海道・岩内高等学校（風巻景次郎）  
岐阜県・郡上高等学校（和田薫）
- 1952(昭27)年 75歳 富山県立山町・高野小学校（古関吉雄）  
富山県・富山工業高等学校（藤村作）  
埼玉県さいたま市・岸中学校（林蔵人）  
滋賀県長浜市・北郷里小学校（須川常治郎）  
滋賀県長浜市・北中学校（辻亮一）  
兵庫県・小野高等学校（藤村作）  
長崎県・北松南高等学校（興梶政夫）※現清峰高
- 1953(昭28)年 76歳 富山県富山市・上滝小学校（大島文雄）  
富山県射水市・下村小学校（大島文雄）  
富山県富山市・上滝中学校（木俣修）  
愛媛県・今治工業高等学校（高見健三）  
福岡県・小倉西高等学校（島田芳文）
- 1954(昭29)年 77歳 山口県・宇部商業高等学校（古関吉雄）

- 〔富山方面出張〕
- 1955(昭30)年 78歳 富山県富山市・月岡中学校 (大島文雄)  
〔富山教育学窓会に出席〕
- 1956(昭31)年 79歳 東京都練馬区・豊玉東小学校 (柴野民三)  
〔富山県人会評議員〕
- 1957(昭32)年 80歳 富山県立山町・立山芦嶺小学校 (前田鉄之助)  
東京都足立区・第十三中学校 (古関吉雄)  
〔富山県人会総会に出席、富山演奏旅行に同行〕
- 1958(昭33)年 81歳 〔福井音楽賞創設〕
- 1959(昭34)年 82歳 富山県高岡市・戸出小学校 (大島文雄)  
東京都大田区・仲六郷小学校 (古関吉雄)  
東京都中野区・新山小学校 (古関吉雄)  
滋賀県長浜市・高月小学校 (古関吉雄)
- 1960(昭35)年 83歳 富山県上市町・宮川小学校 (古関吉雄)  
富山県上市町・上市中央小学校 (古関吉雄)  
東京都足立区・大谷田小学校 (古関吉雄)  
〔武蔵野音楽大学にベートーヴェンホール落成〕  
〔北日本新聞文化賞〕
- 1962(昭37)年 85歳 〔富山県上市町名誉町民〕
- 1963(昭38)年 86歳 〔12月12日永眠〕

次に、制定年不詳の学校を記す。

- 北海道上川郡愛別町・愛別中学校 (佐々木信綱)  
北海道・函館商船学校 (不詳) ※現函館水産高  
福島県伊達市・伊達中学校 (江口榛一)  
茨城県水戸市・五軒小学校 (葛原幽)  
東京都文京区・指ヶ谷小学校 (鈴木修山)  
東京都郁文館学園 (土井晚翠)  
東京都板橋区・第一小学校 (鈴木珪壽)  
東京都大田区・大森第二中学校 (鈴木信吾)  
東京都目黒区・原町小学校 (土岐善麿)  
東京都目黒区・田道小学校 (川口松太郎／北原白秋)  
東京都墨田区・第二寺島小学校 (国語部)  
東京都世田谷区・旭小学校 (豊田八十代)  
東京都・東京陸軍少年飛行兵学校 (百瀬一)  
東京都・旧制第十中・現西高等学校 (加藤司書)  
東京都・旧制鐵道中学校 (大野保)  
静岡県・磐田農業高等学校 (常松麗蔵)  
長野県・中野高等女学校 (湯本道則) ※現中野高

	長野県・須坂園芸高等学校（大井広）※現須坂創成高
	長野県・伊那北高等学校（藤村作）
	富山県富山市・楡原中学校（高崎正秀）
大正時代	富山県入善町・飯野小学校（滝本助造）※旧校歌
	富山県上市町・宮川小学校（福井直俊）※旧校歌
	富山県富山市・水橋西部小学校（飯田虎次郎）
1989～1912	富山県高岡市・伏木小学校（野村範家）
	島根県・大田高女・現大田高等学校（鈴木敏也）
	山口県・三田尻女子高等学校（豊田虎之助）※現三田尻学園誠英高
	愛媛県・新居浜商業高等学校（白川渥）
	福岡県・京都高等学校（島田芳文）
	長崎県・上五島高等学校（龍田杏村）
	長崎県佐世保市・白南風小学校（鈴木政輝）
	大分県・別府鶴見丘高等学校（佐藤四信）
	愛知県・岡崎高等女学校（作詞）※現岡崎北高

上記の年表からは、福井が人生の節目ごとに関係地域の校歌を作曲していることが見て取れる。

1904（明 37）年に富山県師範学校から長野県師範学校に転任すると、退職する 1909（明 42）年までの間に長野県飯田市・飯田尋常高等小学校・現追手町小（1907 年）、同県千曲市・更級尋常高等小学校・現更級小（1908 年）の校歌を作曲している。作詞は、両校とも長野県師範学校の同僚で長野県歌『信濃の国』を作詞した浅井烈である。長野県との縁は、長野県師範学校退職後も続く。長野県山ノ内町・穂波尋常高等小学校・現南小（1917 年）の作詞は、長野師範学校同僚の藤澤倉之助、長野県飯山高等女学校・現飯山南高（1929 年）の作詞は、飯山ゆかりの国文学者・高野辰之である。ほかには、篠ノ井高等女学校・現篠ノ井高（1928 年）、南佐久郡小海町・北牧小海組合立尋常高等小学校・現北牧小（1936 年）、伊那北高（3 校とも藤村作の作詞）、中野高等女学校・現中野高（湯本道則作詞）、須坂園芸高等学校・現須坂創成高（大井広作詞）がある。

1920（大 9）年に東京府青山師範学校教諭に就任すると、富山県・魚津中学校・現魚津高（竹内保治作詞、1921〔大 10〕年）、富山県・魚津高等女学校・現魚津高（松本勝太郎作詞、1923〔大 12〕年）、富山県・小杉農業公民学校・現小杉高（相馬御風作詞、1923〔大 12〕年）の校歌を作曲している。郷里富山県との縁はここから始まる。

武蔵野音楽学校設立が認可された 1929（昭 4）年には、富山県・氷見中学校・現氷見高（古山宗一作詞／藤村作校訂）の校歌が制定されている。作曲は帝国音楽学校初代校長に就任した 1928（昭 3）年から翌年にかけてだったと推測できる。以後、富山県内の学校の校歌を数多く作曲することになるが、驚くのは武蔵野音楽学校が大学へと昇格した 1949（昭 24）年に、富山県内 6 校の校歌が制定されていることである。この年に制定されたということは、作曲は前年もしくは同年と考えられるから、大学設立認可のために多忙な日々を送りながらこれだけの数を作曲したことは驚異的である。なぜなら、認可されるまで何度も文部省と折衝を重ね、時間的にも精神的にも大変な時期だったはずだからである。

また、富山県に關係する学校では、1947（昭 22）年に制定された北海道紋別郡雄武村・雄武国民学校・現雄武小（百田宗治作詞）が挙げられる。雄武村の満徳寺の開基は福井の実兄、福井恵實である。この縁によって作曲依頼があったのかもしれない。

武蔵野音楽大学となってからは、初代学長として多忙な日々を送りながら、富山県内の校歌を数多く作曲している。

そして、富山県内の校歌の締めくくりとして、1960（昭 35）年に郷里の富山県上市町の上市中央小学校と母校の宮川小学校（古関吉雄作詞）の校歌が制定されている。この年は、武蔵野音楽大学ベートーヴェンホールが落成した年であり、福井自身も北日本新聞文化賞を受賞した年であった。1962（昭 37）年には富山県上市町の名誉町民となり、授賞式が上市中央小学校で行われている。そして翌年 12 月 12 日、86 歳の偉大な生涯を閉じるのである。

福井が作曲した校歌の作詞は、藤村作と古関吉雄によるものが非常に多い。

藤村作は、『福井直秋伝』によると、「東京都出身。（中略）東京帝国大学教授。東洋大学学長等を歴任。文学博士。上方文学・江戸文学・近世国文学の泰斗。妻すえは、1902（明 25）年東京音楽学校卒で福井直秋とは同期生。とくに、すえ夫人と福井光野夫人は親交があり、武蔵野音楽学校創立に際しては、夫婦そろって福井夫妻を援助した。藤村は、武蔵野音楽学園（法人）理事をつとめた」<sup>33</sup>間柄であった。

古関吉雄は福島県出身で、明治大学、国立音楽大学教授を務め、音楽教科書の作詞や訳詞を多く残している。訳詞の代表的な例として、音楽教科書に長年掲載された『追憶』がある。作曲家古関裕而は従兄弟である。古関による作詞は 1931（昭 6）年の富山県立山町・五百石尋常高等小学校・現立山中央小に溯るが、この年は武蔵野音楽専門学校が認可された翌年である。そして、1953（昭 28）年に藤村作が亡くなると、古関の作詞が多くなり、福井が校歌を作曲した最後の 2 年間は 1 校を除いてすべて古関の作詞である。

### c. 片山颯太郎

片山颯太郎（1894～1975）は、大阪府出身の作曲家で大阪音楽大学教授を務めた。県内では、2 校の校歌を作曲している。

1930（昭 5）年 36 歳 婦負農学校（相馬御風）※現富山西高（現行と同曲）

1931（昭 6）年 37 歳 砺波中学校（吉波彦作／相馬御風校訂）※現砺波高

前述の‘岡野貞一’の項（18p）で、砺波中学校の校歌が作曲された経緯を記した。当時、東京音楽学校校長だった乗杉嘉寿が砺波市出町出身であった縁で、作曲を依頼したところ、乗杉が多忙だったため、片山颯太郎に委嘱されたとある。婦負農学校の校歌作曲の経緯は明らかではないが、砺波中学校の前年であることから、似たような経緯があったかもしれない。

また、2 校とも相馬御風の作詞または校訂であるが、2 人の関係は明らかにできていない。

## 2. 新制高等学校

### (1) 作詞者

<sup>33</sup> 福井直秋伝記刊行会『福井直秋伝』（1969 年）、99p



## ア. 教育関係者

高岡西部高等学校・現高岡西高（室崎琴月作曲、1948〔昭 23〕年）は、当時の国語科教諭だった島村英男、雄峰高等学校（渡辺貞之作曲、1948〔昭 23〕年）は、当時の教諭だった山森利栄、高岡東部高等学校・現新湊高（宮下舜爾作曲、1949〔昭 24〕年）は、県内高等学校長を歴任した三浦孝之助、富山第一高等学校（佐藤進作曲、1959〔昭 33〕年）は、高等学校長を歴任し富山女子短期大学教授となった柚木武夫、富山東高等学校（大中恩作曲 1962〔昭 36〕年）は、初代校長だった村上元之輔（大中恩は、村上の教え子だった）である。

1960年代半ばから 1970年代にかけては、教育関係者による作詞はなく、再び見られるようになるのは 1980年代になってからである。

福岡高等学校（上埜孝作曲、1983〔昭 58〕年）は、詩人であり高等学校長を歴任した初代校長青塚与市、呉羽高等学校（岩山真理子作曲、1984〔昭 59〕年）は、初代校長の池谷清一、高岡龍谷高等学校（岩河三郎作曲）は、氷見市光伝寺住職で高等学校長を歴任した高峯正岡、大門高等学校（山本淳作曲、1989〔平元〕年）は、初代校長の平田卓郎、高岡西高等学校（松本清作曲、1997〔平 9〕年）は、高等学校長を歴任し、立山博物館長も務めた米田憲三、龍谷富山高等学校（大前哲作曲、1999〔平 11〕年）は、富山県教育委員長を務めた国香正道、新川みどり野高等学校（佐藤進作曲、2001〔平 13〕年）は、前身の新川女子高の教頭だった奥野耕平、片山学園中学校高等学校（佐藤進作曲、2005〔平 18〕年）は、高等学校長を歴任し、開校時の学園長だった廣瀬久雄である。ほかには、制定年は不詳であるが、戸出女子高等学校・現廃校（小澤慎一郎作曲）が、高等学校長を歴任し井波町教育長を務めた稲垣俊之による。

## イ. 県内詩人

富山県内の校歌を作詞している県内の詩人は、次の通りである。

中新川郡立山町出身の民謡詩人であり、北日本新聞社代表取締役を務めた中山輝は、泊高等学校（黒坂富治作曲、1948〔昭 23〕年）、上市高等学校（黒坂富治作曲、1948〔昭 23〕年）、高岡北部高等学校・現伏木高（古関裕而作曲、1957〔昭 31〕年）の校歌を作詞している。ほかには、滑川市出身の詩人で医師でもあった高島高が、水産高等学校・現海洋高（黒坂富治作曲、1948〔昭 23〕年）の校歌を作詞している。

## ウ. 大学教授

富山大学名誉教授で、富山市教育委員長を務めた大島文雄は、県内の小中学校の校歌を数多く作詞している。高等学校の作詞は小中学校ほどではないが、14校に上っている。以下に学校名を記す。（ ）内は作曲者である。

1951(昭 26)年	49歳	富山北部高等学校（荒木得三）、不二越工業高等学校（荒木得三）
1954(昭 29)年	52歳	富山高等学校（山田耕笹）
1957(昭 32)年	55歳	富山女子高等学校（團伊玖磨）※現富山いずみ高
1961(昭 36)年	59歳	大沢野工業高等学校（團伊玖磨）※現富山工業高 井波高等学校（松本民之助）※現廃校
1962(昭 37)年	60歳	高岡産業高等学校（宮下舜爾）※現志貴野高 北日本電波高等学校（松本民之助）※現高朋高 高岡東高等学校（室崎琴月）※現高岡向陵高

- 1964(昭39)年 62歳 砺波工業高等学校(小澤慎一郎)  
富山女子短大付属高等学校(石桁真礼生) ※現富山国際大付属高  
1966(昭41)年 64歳 富山産業高等学校(黒坂富治) ※現中央農業高  
1968(昭43)年 66歳 小矢部産業高等学校(森川隆之) ※現小矢部園芸高  
1976(昭51)年 74歳 富山南高等学校(團伊玖磨)

このうち、富山高等学校の校歌について、大島自身が回想を残している。

「私の母校富山中学の後進である富山高等学校(新制)の校歌を作ったのは昭和二十九年で、それは富山中学創立七十周年の年であった。(中略)その時私は固辞した。私などこの名誉ある学校の校歌を作れるものではないという心持であったが、私にはもっと具体的な恐れがあった。それは、作曲者に山田耕筰氏が予定されていたことである。岩田さんは、その時‘日本一の校歌を作りたいのだ’と言った。この日本一ということも私を恐れさせた。(中略)校歌の内容について、岩田校長は意見を言われなかった。私の思うように作れというのである。作詞の基本になる思想的な、また教育的な内容のことは別として、私が何よりも大事に思ったものは郷土の自然風土である。私は、この郷土に生まれ、育ち、生活をしてきた。その越中の中の自然の、根深さ、力強さ。私はそれに抱かれ、それに打たれてきた。この感動をいづらかでも表現してみたいと思った。それは、私の力に余るものではある。だが郷土の私が作るとなれば、それが私の使命のように思われてくる。そのような気負いもいづらかわいてきて、私はこの困難な仕事に立ち向かうようになった。一と月程してどうにか作詞ができ上がった時、私はぐったりした。こんなつらい仕事はもう御免だ、この後校歌というものは作るまい、と思った。当時の私は五十二才、まだ元気な時であったが、そう思ったことを今も覚えている。できた歌詞に自信はなかった。だが自分の能力の限りをつくしたという思いがあって、僅かに自分を慰めた。」<sup>34</sup>

富山高等学校の校歌を作詞する 1954 年より前、すでに大島は 29 校もの校歌を作詞していた。それでも伝統ある学校の校歌を作詞するという、作曲者がわが国を代表する作曲家・山田耕筰であるという精神的重圧は大変なものがあったことであろう。その後も大島は数多くの校歌を作詞することになるが、必ず現地に足を運び、学校を取り巻く環境や歴史について実際に自分の目で確かめてから作詞に取りかかるという姿勢は変わらなかった。例えば、最後から 2 番目の校歌となる富山市立興南中学校の校歌を依頼された時、「去年の秋、私が本校校歌の作詞を依頼された時、新校舎とその環境を見に行った。刈入れが終わって広々とした田園に、新校舎の外側はすでに出来上がって、白く輝いていた。」<sup>35</sup>とあるし、最後の校歌となった富山市立藤ノ木中学校の校歌を依頼された時は、「私は、本校から見る立山連峰の日本一の景観に感動してこの校歌を作詞した」<sup>36</sup>と述べている。大島が数多くの校歌を作詞したのは、歌詞が優れていただけでなく、こうした誠実な人柄もあったからだといえよう。

また、大沢野工業高等学校の校歌に関して、大島自身が文章を残している。

「理想をもつという欲求とは、いわば精神的な欲求である。良くありたい、高くなりたいたいと

<sup>34</sup> 大島文雄「校歌を作る」～『随筆集 萩咲きぬ』(1979年)、55p

<sup>35</sup> 興南中学校創校三十周年記念誌編集委員会『興南中学校創校三十周年記念誌』(2012年)、4p

<sup>36</sup> 富山市立藤ノ木中学校『創校記念誌「礎」』(1989年)、44p

いう欲求であって、このような願いは、人間としてだれでも持つものであり、やはりこれも人間の真実といわなければならない。そして人間である以上、現実的な真実のみに満足しておられるものではない。必ず理想的真実に対する願いを持つものとする。まして、青年の場合、学徒の場合、その願いが美しく燃えるものを見る。校歌の第一節はそれを歌った。(中略) 諸君の清純な心の象徴として、清純な風景がまわりにひろがっている。(中略) この清純な心を求める‘真実’は高くある。高くあるはずである。その高い真実を求めることを諸君は、自ら確認し、さらに、こころざし高く、真実の追求を誓ってほしいのである。第二節と第三節は、その真実、あるいは真心の実際の面を歌った。工業学校の学問の中心は科学である。今日の科学の奥深さについてはいうまでもない。その科学の道を諸君は学び追求する。これを精神の面からいえば、知性の追求である。しかし、それは頭の表面にあらわれていない。そして力強い実践ということをいっている。(中略) 科学と工業にたずさわる工業高校の諸君に、結論的にいいたいことがある。それは、原子力利用の問題である。(中略) この問題を胸中において、高き人間精神、まごころというものを、声高く歌っていただきたいのである。』<sup>37</sup>

このように、大島は作詞した校歌について、そこに込めた生徒たちに対する自らの願いを書き残していることが多い。

## エ. 中央文壇の詩人・歌人

### a. 土岐善麿

東京府東京市浅草区(台東区浅草)出身で、歌人・国文学者だった土岐善麿(1885年～1980年)は、全国の校歌を数多く作詞している。県内では、次の高等学校の校歌を作詞している。( )は作曲者である。

1949(昭24)年 64歳 氷見高等学校(長谷川良夫)

1950(昭25)年 65歳 小杉高等学校(平井保喜=平井康三郎)

福野高等学校(池内友次郎) ※現南砺福野高

1959(昭34)年 74歳 高岡第一高等学校(平井康三郎)

1965(昭40)年 80歳 二上工業高等学校(信時潔) ※現高岡工芸高

土岐善麿作詞の校歌の作曲者は平井康三郎と信時潔が多いが、県内でも5校中2校が平井康三郎、1校が信時潔作曲である。福野高等学校の池内友次郎は俳人・高浜虚子の次男である。

高岡第一高等学校の校歌は、当時の川原学園長が当時国語審議会長を務めていた土岐と親しい関係にあったことから、学園長の依頼で作られた。<sup>38</sup>

### b. 室生犀星

室生犀星(1889年～1962年)は、石川県金沢市出身の詩人・小説家である。室生犀星記念館編『犀星校歌集』<sup>39</sup>には、室生犀星が作詞した26校の校歌が収録されている。このうち、石川県が12校、東京都が8校、富山県が2校、新潟県、神奈川県、和歌山県が1校ずつ、旧満州が1校である。( )は作曲者である。

<sup>37</sup> 小澤達三『富山県校歌全集 余滴』(1979年、パラマウント社)、25～26p

<sup>38</sup> 記念誌編集委員会『二十五年の歩み』(1984年、高岡第一学園)、21p

<sup>39</sup> 室生犀星記念館『犀星校歌集』(2008年)

1950(昭25)年 61歳 出町高等学校(弘田龍太郎) ※現砺波高

1953(昭28)年 64歳 有磯高等学校(平井康三郎) ※現氷見高

出町高等学校の校歌は、同校の角崎毅教諭が犀星の親戚だった縁で、広島校長が犀星の自宅を訪問して依頼した経緯がある。『犀星校歌集』に掲載されている「犀星日記にみる校歌関連の記述」には、次のような記述が見られる。

・昭和25年6月6日

「越中に出町小學校(ママ)から校歌依頼。承諾の旨、をぢの息子に返事かく。」

・7月6日

「出町高等學校の校歌がやつと形だけ出來た。叙情詩ばかり書いてゐる者は校歌なぞ全くがらにもない仕事であり、千篇一律になりやすいのも、情熱を缺いた仕事に對ふからであらう。今年になり三篇の校歌を作成した。(後略)」

・7月14日

「出町高校の校歌を改作、たびたび改作したのもう施す術もなくなった。校歌は難かしい。本日送稿。(後略)」

・7月20日

「出町高等学校から來電、明日訪ねるといふ、校歌の件ならん。」

・7月21日

「(前略)出町高等学校廣島校長來る。校歌改作を渡す、銘菓‘うす氷’を貰う。」

・9月2日

「をぢ突然來る。出町高校の校歌稿料一萬二千圓持參、をぢの娘婿が高校に勤めてゐる關係から持參してくれたものである。」<sup>40</sup>

また犀星は、有磯高等学校近くの伏木港に住んでいた義姉をたびたび訪れていた関係で、有磯高等学校から校歌作詞を依頼された経緯がある。『犀星校歌集』掲載の「犀星日記にみる校歌関連の記述」には、次のような記述が見られる。

・昭和28年6月17日

「春の頃、富山縣の有磯高校の落合岩次郎校長から校歌依頼があり、返事を出したがそれきり何ともいつて來なかつたが、けふ突然、十九日午前に伺ふといつて來た。わすれてゐる時分に、こんなふうには申込んでくるとは、妙な學校である。」

・6月19日

「富山縣の有磯高校の落合岩次郎校長來訪、校歌依頼、作曲は平井康三郎に委囑の豫定。」

・7月8日

「氷見の有磯高校、校歌を送稿。(後略)」

・7月18日

「校歌の稿料二萬圓、有磯高校からとどく。」

・10月2日

「有磯小校(ママ)々長來訪、校歌につき解釋をもとめらる。女生徒が廊下でこんどの校

---

<sup>40</sup> 室生犀星記念館『犀星校歌集』(2008年)、39p

歌は校歌らしくないといったのが、校長室にきこえたので、岩次郎校長は生徒をあつめ、校歌らしくない校歌であつてこそ、ほんとの校歌だといひ、いましめたといつていた。

どこか、疝しやくのある、思ひつめたやうな人である。(後略)<sup>41</sup>

この日記からは、当時の室生犀星がどのように校歌の作詞依頼を受けていたかがわかる。

### c. 西條八十

西條八十(1892年～1970年)は、東京都出身の詩人・童謡詩人・歌謡詩人・フランス文学者である。夫人は富山県黒部市若栗の出身である。県内では次の学校の校歌を作詞している。( )は作曲者である。

1950(昭25)年	58歳	富山中部高等学校(服部良一)
1951(昭26)年	59歳	桜井高等学校(長谷川良夫)
1955(昭30)年	63歳	射水市・大門小学校(古関裕而)
1958(昭33)年	66歳	高岡市・国吉小学校(佐々木すぐる) 黒部市・北部中学校(佐々木すぐる) ※現高志野中

『神通中学校・富山中部高校五十年史』に、校歌制定時の様子が明らかにされている。

「校章に次いで決定をせまられたのは校歌であった。11月の初めの職員会議に校歌の制定問題が初めて議題としてとりあげられたが、この時決められたのは、‘一、校歌は生徒から募集する。二、選考にあたっては文芸部が主体的役割をはたす。三、文芸部の選考を通過したものを原案として職員会議が最終的に決定する’ という三つの原則であった。この職員会議の決定に基づいて、文芸部が全校生徒に校歌の応募を呼びかけた。冬休みのあけた第三学期最初の職員会議で、校長は、富山中部高校の第一回卒業式に校歌を歌わせたいという意向を表明した。しかしこの時まで、生徒の応募するものがなかったので、公募という方式は再検討されなければならなかった。

当時本校の英語担当の志波駿介教諭は、自ら校歌として一編の詩をつくった。学校としては、この志波教諭の作品を国語科の教員が検討添削し、生徒にもはかった上でこれを最終的に校歌とすることにした。作曲は校外の専門家に依頼することにした。一月末、志波教諭の作品に国語科教員の意見を加えた校歌原案が全校生徒に示され、クラスごとの意見を聴取したが、積極的な意見はでてこなかった。三月の卒業式に歌うことが不可能なものならば、いっそ時間をかけて、いま一度検討を加えた方がよいということになって、結局この時期の校歌選定は見送られた。第一回卒業生は、校歌を歌うことなく、三月二日学園を巣立った。

しばらく中断した形になっていた校歌の制定は、二四年度の半ばになって急速に進展した。この年の夏、夏季合宿練習のために富山に来て、本校のグラウンドを借りていた早稲田大学サッカー部の学生が‘都の西北……’と歌っていたのを耳にした柘田校長は、儀式ばったこれまでのような校歌ではなく、早大の歌のように生徒がいつでも歌える親しみやすい校歌にしたいと考えた。校長は早稲田大学出身の清田教諭に校歌作製について相談した。清田教諭は早速上京し、同じ早大出身の西条八十氏に校歌の作詞を依頼した。西条氏は、作曲を服部良一氏に頼むことを条件に作詞を受諾した。ここに懸案の校歌の問題は解消した。

<sup>41</sup> 前掲書、41p

西条八十作詞、服部良一作曲になる富山中部高等学校校歌は、第二回卒業式に間もない昭和二年二月完成した。校歌作製にかかる費用には、第二回卒業生の卒業記念寄付金があてられた。校歌は、日時の余裕もないままに、特別の披露行事を行なうことなく、卒業式当日初めて公にされた。西条八十、服部良一の名から流行歌的なものを連想していた生徒は、その新鮮なメロディーに魅了され、‘若きあこがれに、瞳は燃えて……’と、声高らかに歌ったのであった。<sup>42</sup>

西条八十と服部良一による『青い山脈』が発表され大ヒットしたのは、1949（昭 24）年であるから、翌年にこの組み合わせで校歌が作られたのは画期的な出来事であったに違いない。

#### d. 堀口大學

堀口大學（1892年～1981年）は、東京都出身の詩人・歌人・フランス文学者である。

県内では、2校の校歌を作詞している。

1952(昭 27)年 60歳 高岡高等学校（團伊玖磨）

1953(昭 28)年 61歳 富山商業高等学校（團伊玖磨）

富山県立高岡高等学校教諭だった山口久雄が校歌制定時の様子を回顧している。

「戦後、学制改革の波が漸く収まり、昭和二十五年四月一日には高岡中部高等学校は普通、家庭、定時制普通の課程をもつ単独高等学校になりました。

新制高等学校の内容が改変すると、学校教育の基礎づくりが始まり、教育方針や教育目標、校章、制服がきまり、昭和二十六年には新しい校旗も樹立され、続いて校歌の制定が求められました。

職員会議で、校歌制定の事は私に一任すると言う事となり、私は国語科の先生方と相談して、数名の作詩候補者をしぼりました。佐藤春夫、室生犀星、堀口大学、白鳥省吾、三好達治、中村眞一郎氏らであったと思います。

私は夏休みの或る日、この使命を帯びて上京し、先ず有楽町の読売新聞本社を訪れました。

かねて、大先輩正力松太郎社長には学校からその旨の依頼がなされていたので、私はすぐに文化部長細川忠雄氏の許に案内されました。部長は白髪の恰幅の良い紳士でした。

細川部長は私の用意した数名の詩人の名を聞くと、堀口大学先生なら連絡をとり易いとの事で、直ちに電話で内諾をとりつけて下さいました。堀口大学氏は昭和二十五年から読売文学賞の選考委員をやっておられました。私は細川部長の指示通り、堀口先生を訪ねて、葉山一色に向かいました。葉山の小高い丘の上に先生の新居がありました。そこからは、逗子の海が一望でき、涼しい浜風が汗をぬぐうのに大変心地よかった事を覚えています。

先生は、浴衣姿でにこやかに私を迎えて下さいました。私は携帯した学校要覧、高岡市勢等を出して、本校は豊かな歴史と美しい自然に包まれた文化的環境である事、また、幾多の人材を輩出した伝統校である事、そして質実剛健な気風の中に真理を探求する向学心の溢れる校風を持つ学校である事を話しました。

<sup>42</sup> 神通中学校・富山中部高校五十年史編集委員会『神通中学校・富山中部高校五十年史』（1970年、富山県立富山中部高等学校）、319～320p

作曲者については、先生の方から團伊玖磨先生に依頼して下さる事になりました。その時、先生から‘曲についての希望がありますか’とのお尋ねに、私は応援歌にも唱えるような行進曲風なものをお願いしました。

最後に、先生から、一度学校を訪ねて、生徒に接してみたいから秋には高岡へ行きましょうとの約束を頂いて、先生の家を辞退しました。

九月になり二学期が始まると、先生は約束通り、高岡へお出でになりました。

来校のあさ、私は先生を案内して、旧国道八号線上、氷見線が下を通り抜ける地点で立山連峰を遠望しましたが折悪しく雨雲に覆われて立山は見る事が出来ませんでした。

学校に着くと、職員、生徒一同、講堂に集まって先生の到着を待ちかねていました。

先生は、やがて講堂の壇上に登られると、突然‘生徒の皆さんの声を開きたいから、何でもよい、唱って欲しい’とおっしゃいました。

急遽、花井吉三郎先生はタクトをとって『君が代』を斉唱しました。

先生はジッと耳を傾けておられましたが、その時の生徒の歌声は本当に明るく清純な響きであった事を私は今でも身に沁みて忘れられないのであります。

生徒たちの憧れや理想を求めて止まぬ至高至純な心から湧き出る歌声が、生徒の声を求めていた先生の琴線に触れ、‘あこがれ’とか‘理想’と言う詩想が、この時に出来たのではないかと思います。

青空をめざすあこがれとか、理想は遠く求めよと言う先生の詩想を導いたのは実は生徒自身であったと思います。

先生はその後、小島威彰先生の案内で万葉遺跡めぐりをなさいましたが、その頃は未だ万葉ラインが出来ておらず、二上山の麓を伏木、雨晴と海岸線を廻り、国泰寺を経てお帰りになりましたが、その時は、すっかり晴れ上がって青天の下、聳え立つ立山連峰を心ゆくばかり遠望されたと言う事であります。

恐らく、講堂で聞かれた生徒の歌声と遠望する立山の雄姿を重ね合わせて‘若人のあこがれの姿’と映じたのでありましょう。かつて大伴家持が神格化して歌った立山讃歌を堀口先生は‘青空めざすあこがれに’とヒューマンライに立山を賛美されたのであります。

その夜、先生は古城公園の濠端の旅館‘古城’に一泊され、本校先生方と歓談されました。

その時、部屋に懸かっていた中川一政画伯の二上山の絵をご覧になって、‘なるほど乳房のような二上山である’とおっしゃった事が印象的でありました。こんな所にも先生のフランス風なダンディで瀟洒なエロチシズムを感じさせるものがありました。

又、川崎好治先生はその時の事を回想して、堀口先生は、‘私は子供が小さいので格別に健康に注意している。酒も好きだが決して深酒をしない。又、原稿は朝早く起きて書くようにして、決して夜更かしはしないようにしている。’と話された事を後日、語って下さいました。

先生は前年の昭和二十五年には、ライフワークの『ヴェルレーヌの詩集』（新潮社版）の改訂版を上梓されて、一息ついておられるような状態であったので、本校の校歌をも快く引き受けて頂いたのだと思います。

年を越して、昭和二十七年の一月には先生の許より原稿用紙にペン書きの校歌が團伊玖磨

先生の楽譜と共に長久繁松校長の許へ届きました。その後、花井吉三郎先生の熱心な指導が続き、二月四日校歌制定の披露が行なわれました。

その年の春休みだったと思いますが、私は、再び両先生にお礼を申し上げべく、上京しました。葉山の堀口先生は相変わらず和服姿で、にこやかに迎えて下さいましたが、私に‘一度唱って聞かせてくれ’と所望され、辟易しながらも唱い終り、ホッとした事も懐かしい思い出であります。

先生とお別れして、その足で團先生のお宅へと向かいました。先生は都心から少し離れた所に住んでおられましたが、門構えのある広いお屋敷であったと思います。二階の先生の部屋に通されると、早速と先生は校歌をピアノでお弾きになりました。お礼を申し上げて玄関を出て門の所に近づいた時、二階からピアノの音が流れて来ました。先生が校歌を弾いて私を送って下さっているのです。

私もしばらく門の所に立ち止まって聞いていましたが、門を離れる頃は、すっかり夕闇があたり立ちこめていました。これが校歌制定にまつわる、時には模糊として、時には鮮烈によみがえって来る私の思い出であります。」<sup>43</sup>

また、『富商百年史』には、昭和 27 年 12 月 28 日付の堀口大學から亀谷静校長に宛てた手紙の抜粋が掲載されている。

「御地から帰京いたすや早速腹案を得て、作詞、このほど脱稿、年内にお目にかけようと思っておったところでした。お手紙でお急ぎの事情もよくわかりますので、早速清書同封お目にかけることにいたします。皆さんで十分検討の上、御不満な点がございましたら、御遠慮なくおっしゃって下さい。もしまたこのままでよろしいとおぼしめすなら、電報でOKをたまはりたく、さすれば先生から直接、作曲者團氏に歌詞を手交、十分期日にまに合ふやう御配慮を願ふことにいたします。」<sup>44</sup>

『富商百年史』には作詞を堀口大學に依頼したいきさつは記されていないが、高岡高等学校の翌年ということを見ると、同様な手順が取られたかもしれない。いずれにしても、堀口が当時東京から高岡まで 10 時間以上かかったであろう汽車に乗り、高岡高等学校に足を運んで生徒の歌声に耳を傾けたり、送付した歌詞の手直しに応じようとしたりした姿勢からは、誠実で自らの仕事に責任をもつ氏の性格が読み取れる。

#### e. 江間章子

江間章子（1913～2005 年）は、新潟県高田市出身の詩人、作詞家である。『夏の思い出』（中田喜直作曲）、『花の街』（團伊玖磨作曲）がよく知られている。富山県内では、新川女子高等学校（現廃校）の校歌を作詞している。作曲は中田喜直である。竹中祐博初代校長の肝いりでこの組み合わせが実現した。<sup>45</sup> 江間章子は、1968 年 5 月 3 日に学校建設予定を視察し、イメージ作りを行っている。<sup>46</sup>

<sup>43</sup> 山口久雄「校歌雑感—作詩・作曲について—」～富山県立高岡高等学校 100 年史編集準備委員会『母校回顧第 2 集』（1993 年）、8～11p

<sup>44</sup> 富山県立富山商業高等学校創立百周年記念事業実行委員会『富商百年史』（1997 年）、378p

<sup>45</sup> 富山県立新川女子高等学校『三十年のあゆみ』（1996 年）、6p

<sup>46</sup> 富山県立新川女子高等学校『二十年のあゆみ』（1986 年）、17p



## f. 谷川俊太郎

谷川俊太郎（1931年～）は、東京都出身の詩人である。数多くの作曲家が谷川の詩に作曲していることで知られる。富山県内では、高岡南高等学校の校歌を作詞している。作曲は中田喜直である。

高岡南高等学校には、『作詞者として』と題した谷川自筆の手紙が残されている。

「作詞者として 谷川俊太郎

高岡南高校を初めて訪れたとき、空気に針葉樹の香りのあったことが、非常に印象的でした。ここには大地がある、それが私の動かしがたい第一印象でした。私のうかがったのは三月の終りでしたが、先生がたのお話によると冬にはその大地が雪におおわれるとのこと、その折とったメモに、すでに私は〈土眠り、土めざめる〉という短い一行を記しています。その場であるいはどなたかが口にされた言葉であったかもしれませんが、前日に犀星忌の末席に連なった私には、その一行はどうしても犀星先生の『寺の庭』の冒頭、〈つち澄みうるほひ〉と無縁であるとは思えませんでした。

校歌はそのようにいわば、土地の精霊に助けられて〈土眠り 土はめざめる〉という一行を中心に、徐々に形をなしてゆきました。〈ひめられた力〉という言葉も、〈一粒の種子〉という言葉も、土地と人間とのかかわりを念頭におくとき、ごく自然に私の心に浮んできたものです。私自身が作詞したというよりも、むしろ高岡というひとつの土地と、そこに生れた学校、その学校を学校たらしめている先生がた、生徒たち——それらの存在が私の心にかもし出した言葉、私はそれに或る形を与える手伝いをしたに過ぎない、とそんなふうに私は感じています。

記念の式典に参列できないのは残念ではありますが、それは私にとっては必ずしも必要なこととは思わないのです。校歌は作詞者のものでも作曲者のものでもなく、これからそれに魂を入れてゆく学校の皆さんのものだ考えるからです。校歌の本当の作者は、ひとつの共同体としての高岡南高校の人々自身であるということ、私は媒介者としての自負と期待をこめて申し上げたいと思います。」<sup>47</sup>

犀星忌は3月26日であるから、谷川が高岡南高等学校を訪れたのは3月27日だったことがわかる。北陸の長い冬が終わり、大地の雪が消え、桜の蕾も膨らみを増してくる時期である。広葉樹は葉を落としたままで、針葉樹の緑だけが残っていたと想像できる。空気にその香りを感じ取り、雪が消えた大地を目の当たりにした詩人の鋭い感性が校歌の一節を導いたことがよくわかる一文である。

## g. 片岡輝

片岡輝（1933～）は、中国大連生まれの詩人・文学者である。『ひとつの朝』『わが里程標』などの合唱曲の作詞で知られ、現在東京家政大学学長である。富山県内では、富山いずみ高等学校（鈴木憲夫作曲）、富山高等専門学校（池辺晋一郎作曲）の校歌を作詞している。

富山県と片岡輝との関係は、1996（平8）年に富山県で国民文化祭が開催された時に溯る。

<sup>47</sup> 富山県立高岡南高等学校『十年史』（1984年）、6p

この時の開会式賛歌『海と山と川と人と』が片岡輝作詞、池辺晋一郎作曲であった。また 2000（平 12）年に開催された 2000 年とやま国民体育大会のイメージソング・国体賛歌『あいの風吹く』も片岡輝作詞、池辺晋一郎作曲であった。旧富山女子高等学校が共学になり、富山いずみ高等学校が開校したのは 2002（平 14）年、国立富山工業専門学校と国立富山商船専門学校とが統合して、新たに独立行政法人・国立高等専門学校機構・富山高等専門学校が開校したのは 2009（平 21）年だった。これらの曲が生まれた背景には、中村義朗富山大学名誉教授の人脈によるところが大きい。中村と池辺は、全日本合唱連盟の関係で親しい間柄であった。

## (2) 作曲者

### ア. 教育関係者

旧制神通中学校教諭だった渡辺貞之が雄峰高等学校（1949 年制定、当時の教諭山森利栄作詞）の校歌を作曲している。ほかには、富山師範教諭だった荒木得三が富山北部高等学校（1951 年制定、大島文雄作詞）と不二越工業高等学校（1951 年制定、大島文雄作詞）がいるのみである。佐藤進は富山市内中学校教諭を経て富山市内の中学校長を歴任した人物であるが、教育関係者というより、県内作曲家というべきであろう。

したがって、小中学校で多かった教育関係者による作曲は、新制高等学校の場合ほとんど見られないと結論づけてよいと思われる。その理由は、校種が上がるにしたがって、作曲も本格的なものが求められたということなのであろう。

### イ. 県内作曲家

#### a. 宮下舜爾

宮下舜爾（1925 樺太～2007）は、両親共高岡市出身だったが、父親の仕事（王子製紙）の関係で樺太に生まれ、小学 5 年の時に家族と共に高岡に戻った。日本高等音楽学校作曲科に入学、松平頼則、小船幸次郎、諸井三郎に師事した。1944（昭 19）年 10 月に同校を繰り上げ卒業し、陸軍戸山学校軍楽隊に入隊する。同期兵には團伊玖磨や芥川也寸志などがいた。1945（昭 20）年 8 月、両親の疎開先だった小矢部市に戻る。<sup>48</sup> 宮下が小矢部市内の小中学校校歌を 3 曲（宮島小＝現東部小、水島小＝現津沢小、東部小）作曲しているのはその関係があつてのことだったかもしれない。1947（昭 22）年に高岡市立芳野中学校、1950（昭 25）年に県立石動高等学校教諭となり、1952（昭 27）年に北日本放送局開局と同時に入社、アナウンス部長、編成、制作、業務、報道の各局長を経て、1975（昭 50）年、社長室長にて退社した。その間音楽活動、合唱活動、作曲活動を続け、高岡音楽連盟副理事長、呉西合唱連盟理事長を務めた。宮下が作曲した富山県内の高等学校校歌は 4 曲で、わかりやすい楽曲構成と美しい旋律が特徴である。（ ）は作詞者である。

1949(昭 24) 年	24 歳	旧新湊市・現射水市・高岡東部高等学校（三浦孝之助） ※現新湊高、同曲
1962(昭 37) 年	37 歳	高岡市・高岡産業高等学校（大島文雄）※現志貴野高、同曲
1971(昭 46) 年	46 歳	旧東砺波郡平村・現南砺市・福野高等学校平分校（宮沢章二） ※現南砺平高、同曲

<sup>48</sup> 宮下舜爾・高岡市史編さん室『高岡市史「現代編」編さんノート 音楽』（2006 年）、8～9p

不詳 富山市医師会看護専門高等学校（寺津幸治）

#### b. 佐藤進

佐藤進（1934～）は、旧東砺波郡城端町・現南砺市に生まれた。富山大学教育学部卒業後は富山市内の中学校音楽教諭として勤務し、富山市立山室中学校、同西部中学校校長を歴任した。教諭時代は松本民之助に作曲法を師事し、数多くの作品を発表している。富山県内の高等学校の校歌は3曲を作曲している。（ ）は作詞者である。

1963(昭38)年 30歳 富山市・富山第一高等学校（柚木武夫）

1992(平4)年 58歳 富山市・片山学園中学校・高等学校（廣瀬久雄）

2001(平13)年 67歳 魚津市・新川みどり野高等学校（奥野耕平）

#### ウ. 大学教授

##### a. 黒坂富治

黒坂富治（1911～1994）は、下新川郡朝日町平柳60番地に生まれた。1931（昭6）年に20歳で富山県師範学校を卒業、1936（昭11）年に東京音楽学校を卒業し、富山県女子師範学校教諭となった。1943（昭18）年に富山師範学校助教授、1949（昭24）年に富山大学教育・文理学部助教授、1966（昭41）年に教授となった。1969（昭44）年から富山大学教育学部附属中学校長を2年間務めている。富山大学を退官した1977（昭52）年に新潟青陵短期大学教授となった。富山県内の校歌を多数作曲した人物として知られるが、高等学校は4曲に留まっている。（ ）は作詞者である。

1948(昭23)年 37歳 滑川市・水産高等学校（高島高）※現海洋高・現行と同曲

1949(昭24)年 38歳 下新川郡朝日町・泊高等学校（中山輝）

1950(昭25)年 39歳 中新川郡上市町・上市高等学校（中山輝）

1966(昭41)年 55歳 富山市・富山産業高等学校（大島文雄）

※現中央農業高・現行と同曲

##### b. 小澤慎一郎

小澤慎一郎（1913～1985）は、下新川郡朝日町泊に生まれた。1934（昭9）年に富山師範学校を卒業、中新川郡東水橋小学校の訓導となった。1937（昭12）年に東京音楽学校に進学し、声楽を木下保に師事した。1940（昭15）年に同校を卒業、富山師範学校教諭、富山青年師範学校講師となった。1943（昭18）年に富山師範学校助教授、1949（昭24）年に富山大学教育・文理学部助教授、1972（昭47）年に富山大学教育学部教授となった。1976（昭51）年から富山大学教育学部附属中学校長を4年間務めている。1979（昭54）年に退官、名誉教授となった。1980（昭55）年からは洗足学園魚津短期大学教授を務めた。その間、富山県合唱連盟理事長、会長を務め、県内の合唱界に多大な貢献をした。県内の小中学校校歌を多数作曲しているが、高等専門学校を含めた高等学校の校歌作曲は4曲である。（ ）は作詞者である。

1964(昭39)年 51歳 砺波市・砺波工業高等学校（大島文雄）

1970(昭45)年 57歳 旧新湊市・現射水市・富山商船高等専門学校（大島文雄）

※現富山高専射水キャンパス

1974(昭49)年 61歳 富山市・富山工業高等専門学校（野路末吉）

※現富山高専本郷キャンパス

不詳 高岡市・戸出女子高等学校（稲垣俊之）※廃校

### c. 松本清

富山大学人間発達科学部教授・松本清は、県内 2 校の校歌を作曲している。（ ）は作詞者である。

1997(平 9)年 高岡市・高岡西高等学校（米田憲三）

2012(平 14)年 氷見市・氷見高等学校（呉羽長）

## エ. 富山県ゆかりの大学教授

### a. 福井直秋

富山県中新川郡上市町江上出身で武蔵野音楽大学を創設した福井直秋（1877～1963）は、県内の小中学校の校歌を多数作曲しているが、高等学校は 1 校のみである。（ ）は作詞者である。

1952(昭 27)年 75 歳 富山市・富山工業高等学校（藤村作）

### b. 橋本秀次

橋本秀次（1905～1963）は、下新川郡入善町新屋に生まれた。東京音楽学校卒業後は、同校助教授を経て教育出版社や教育芸術社に勤務した。1962（昭 37）年に金沢大学教育学部の初代音楽科教授になったが、翌年 3 月に心臓発作で死去している。橋本が作曲した校歌は、県内では小学校が 9 校、中学校が 2 校で、高等学校は 1 校である。（ ）は作詞者である。

1951(昭 26)年 46 歳 下新川郡入善町・入善高等学校（大木惇夫）

### c. 森川隆之

森川隆之（1940～）は、旧東砺波郡・現砺波市庄川町で生まれた。父の森川彦治は、大澤欽治富山大学名誉教授の実兄である。1968（昭 43）年に和歌山大学に赴任、1989（平元）年には和歌山大学教育学部附属小学校長を務めた。現在名誉教授。和歌山第九合唱団の指導を長年にわたって務めている。1990（平 2）年にサントリー地域文化賞、1993（平 5）年に和歌山県文化奨励賞、1994（平 6）年に和歌山市文化功労賞、2011（平 23）年に和歌山市文化賞を受賞している。県内高等学校校歌の作曲は 1 曲である。（ ）は作詞者である。

1963(昭 38)年 23 歳 高岡市・戸出西部小（菊池靖雄）

旧西砺波郡福光町・現南砺市・山田小学校（野村玉枝）

※現福光東部小

旧西砺波郡福光町・現南砺市・北山田小学校（荒井光隆）

※現福光当東部小

1968(昭 43)年 28 歳 小矢部市・小矢部産業高等学校（大島文雄）

※現小矢部園芸高・現行と同曲

1970(昭 45)年 30 歳 旧東砺波郡・現南砺市・井波小学校（島田憲一）

1975(昭 50)年 35 歳 下新川郡入善町・入善西中学校（田原長五郎）

旧新湊市・現射水市・東明小学校（大島文雄）

不詳 旧東砺波郡庄川町・現砺波市・東山見小学校（不詳）

また、和歌山市を中心に、統合・新設校の校歌を多く作曲している。

1965(昭 40)年 25 歳 和歌山市立有功小学校（河野洋純）

1981(昭 56)年 41 歳 和歌山市立八幡台小学校（河野洋純）

1984(昭 59)年	44 歳	和歌山市立有功中学校 (北川治)
2010(平 22)年	70 歳	海南市立加茂川小学校 (鷹羽狩行)
2015(平 27)年	75 歳	和歌山県立新翔高等学校 (梅田恵以子)
	不詳	新宮市立神倉小学校 (田村さと子)
		和歌山市立貴志中学校 (藤原つたえ) ※1987 年開校
		和歌山県立紀北農芸高等学校 (引田玉男) ※1987 年開校
		和歌山県立たちばな支援学校 (高瀬司行) ※1991 年開校
		和歌山市立有功東小学校 (河野洋純) ※1993 年開校
		和歌山県立紀央館高等学校 (梅田恵以子) ※2003 年改称

また、随筆家・梅田恵以子とのコンビで和歌山の歌を数多く発表しているほか、多くの作品を発表している。

1964(昭 39)年	24 歳	草野心平の詩 (蛙) による混声合唱と管弦楽のための コンポジション
1970(昭 45)年	30 歳	古典幻想曲, オスティナート
1981(昭 56)年	41 歳	混声合唱組曲「紀の国のはるに寄せて」(音楽之友社)
1982(昭 57)年	42 歳	ピアノのための主題と六つの変容 (全音楽譜出版社) ピアノ小品集「子どもの頃の郷愁」(全音楽譜出版社)
1986(昭 61)年	46 歳	混声合唱組曲「熊野」(音楽之友社)
1987(昭 62)年	47 歳	同声合唱「紀州は海の町」(教育芸術社) 混声合唱組曲「清姫」
1991(平 3)年	53 歳	紀州の歌 (教育芸術社)

## オ. 富山県ゆかりの作曲家

### a. 岩河三郎

岩河三郎 (1923~2013) は、富山市出身の作曲家で、県立富山商業高等学校を経て東京音楽学校に進み、1947 (昭 22) 年に卒業した。『春のしん気楼』『寒ブリの歌』『巢立ちの歌』『木琴』『親知らず子知らず』など、小中学生向けの合唱作品が多い。

岩河が作曲した県内の校歌は、小学校が 7 曲、中学校が 5 曲である。統合されたり新設されたりした学校が多い。高等学校は 1 曲である。

1984(昭 59)年 59 歳 高岡龍谷高等学校 (高峯正岡)

高岡龍谷高等学校は、1963 (昭 38) 年、親鸞聖人 700 回大遠忌法要を記念して創設された清心女子高等学校が、1983 (昭 58) 年に男女共学化となり、校名を現在の名称に変更、校歌も新たに作られたものである。なお、作詞者の高峯正岡は氷見市光伝寺住職で氷見高等学校長を務めた人物である。

## カ. 中央楽壇の作曲家

### a. 梁田貞

梁田貞 (1885~1959) は、札幌市出身の作曲家である。作品は、童謡、唱歌、歌謡曲など、多岐にわたる。『とんび』『どんぐりころころ』『お玉じゃくし』『城ヶ島の雨』がよく知られてい

る。かつての勤務校である日比谷高等学校合唱祭の‘梁田賞’は梁田を讃えて制定されたものである。梁田が作曲した県内校歌は、1曲である。

1928(昭3)年 43歳 高岡商業学校(相馬御風) ※現高岡商業高

なお、高岡商業学校は、1948(昭23)年4月に高岡商業高等学校となったが、同年9月から1957(昭32)年3月まで高岡西部高等学校と称し、校歌も島村英男(当時の国語科教諭)作詞、室崎琴月(高岡市出身の作曲家)作曲(1948年制定)によるものだったが、1957(昭32)年4月から相馬御風作詞、梁田貞作曲の校歌に戻されている。

## b. 山田耕筈

山田耕筈(1886~1965)は、東京都出身の作曲家である。わが国の音楽界の中心にあった人物で、『赤とんぼ』『からたちの花』『この道』などがよく知られている。県内の新制高等学校では、1校の校歌を作曲している。

1904(明37)年頃 18歳 滑川市・旧早月加積小学校(川崎清男) ※現東部小

1951(昭26)年 65歳 富山市・芝園中学校(大木惇夫) ※現芝園小と同曲

1953(昭28)年 67歳 富山市・富山高等学校(大島文雄)

不詳 富山市・市立富山工業学校(相馬御風) ※現富山工業高

不詳 富山市・藤園高等女学校(大谷嬉子) ※現龍谷富山高

富山高等学校の校歌制定の経緯については、‘大島文雄’の項で記したが、富山県との関係という点で、長年にわたり県内の音楽教育に尽くした廣田宙外について記しておく必要がある。

廣田宙外(1909~2004?)は岩手県出身で、富山市内の中学校の音楽教師を長年にわたって務め、婦中町立城山中学校長、富山市立和合中学校長、富山市立芝園中学校長を歴任した。山田耕筈と出会ったのは、廣田が東洋音楽学校の学生だった頃である。山田の指揮する合唱団で歌ったのが縁で、山田に師事するようになる。その後、廣田が富山市立芝園中学校に赴任した折に、当時の校長・助川寅七から校歌制定の相談を受け、恩師の山田耕筈に依頼したという経緯がある。

廣田は、当時の様子を次のように回想している。

「校歌制定の話に戻るが、校長は予算がないこと故、両先生相談されて、一日もはやく生徒の情操教育のため、校歌の作曲をとの話のようである。当時新制中学校の校歌制定の状況を調査してみると、詩は大島文雄曲は旧師範学校の音楽教師によるものが多く、費用はかかっていないが、校歌としての評価は果たしてこれで良いのかと考えさせられるものも無しとはしない。他校はともあれ、わが芝園中学校初代校長石井逸太郎先生は創設に当って、“本校をして県下第一の模範中学校たらしめん云々”の言葉を述べられた由緒ある中学校なのである。私は、このことを率直に校長に話し、お聞きした校歌制定の校長としての意見には賛成しかねる。いやしくも県下第一の模範中学校の校歌制定については、後世本校を巣立つ卒業生が将来かけて誇り得る校歌として、日本の音楽史に残るであろう最高の作詞家作曲家に依頼すべきであり、単に費用を節約するとの理由から、間に合わせに経験もない音楽教師にまかせるべきでないこと、作曲とはただ節付けをすればよいというものでなく、芸術作品としての学的内容が背景に裏付けされるべきであると、縷々進言した。

校長は“君に一任すれば立派な校歌制定は可能か”と言われるので、私は作詞家にも作曲家にも知人や恩師がいる故、交渉次第では可能と考えるが、問題は予算がどれだけ捻出で

きるか校長の腹をきかないと返事は出来ぬとのやりとりから、校歌制定費用三万円と交渉のための出張旅費という少額——私はいささか不安を感じたものだが、校長相手に大見栄を切った手前、山田耕筈先生に笑われることを承知の上で交渉を始めたものだ。

私は校歌の作曲者は山田耕筈先生作詞者は作曲家の指名される方であることの下承を得て、校歌の内容について意見を求めたものだが、校長は立山と神通川の名称をとりいれ新教育の理念を歌いあげることとの漠然とした話であったが、依頼された以上校歌に相応した言葉をと上京の車中で思索して、平和、真理、自立、磯部の桜を歌いこんだらと考え、東京田園調布の山田耕筈先生宅を訪ねたのである。

さっそく山田先生に新制中学校々歌作曲の依頼を申上げ、その予算はこれこれで現在の校舎は假校舎だが、将来は文部省モデルスクール候補校となること、本校初代校長石井先生が、“県下随一の中学校たらしめん”と宣言されたことなど、詳細に報告し、作曲料として少すぎるが是非先生にと低頭百拝したのである。当時先生の作曲料は依頼されたものは安くても十萬、作詞料はその半分が常識なのである。先生は私の話を微笑されつつ聞いてくださり、“君の頼みだからどうか作ってあげたいが作詞家は私から話すのか”と問われたので、私の友人に川路柳虹、佐藤惣之助、白鳥省吾、福田正夫がいることを話したが、どうも気にいらぬ御様子であるので、先生に御依頼したい旨申し上げると、しばらく間をおいて“広田君大木惇夫君でどうか”と電話ですぐ来宅されるよう呼びだされたのである。

恩師山田耕筈先生の好意に満ちた御配慮は終生忘却することが出来ぬ私である。

先生は、大木先生が来宅なさると私を紹介され、すぐ校歌制定の話に移られ、まず予算がないことで申訳けないが、私の弟子のことでもあり、作詞料は一で作曲料は二でと交渉して下さり、大木先生も山田先生の頼みでもあり心良く承諾され、かくして、富山市立芝園中学校校歌が誕生する運びとなったのである。<sup>49</sup>

県立富山高等学校校歌が制定されたのはこの2年後である。作詞の経緯に関しては大島文雄自身が記しているとおりであるが、作曲者選定の経緯についての史料は確認できていない。当時富山県において山田耕筈と面識があった廣田が関係していたかもしれない。山田が、安価な作曲料で校歌の作曲を引き受けたのは、弟子の依頼という事情があったかもしれないが、前述のように山田にとって校歌の作曲は本業と同程度の重みがあったからこそ、富山市を代表するであろう新制中学校の校歌作曲を引き受けたのではないだろうか。富山高等学校の場合も、県庁所在地を代表する新制高等学校の校歌を作曲するという使命感に満ちた思いがあったのではないだろうか。

これらの2曲は、驚くほど旋律が似ている。

まず、富山市立芝園中学校校歌の前奏と県立富山高等学校校歌の最後の部分「とやまこうこう」の旋律は、若干リズムが異なるだけで、構造は同じである。芝園中学校前奏の前半は、校歌の歌い出しの旋律を引用したものであるが、後半の旋律はこの後一度も出てこない。

次に、芝園中「へいわのにじを」に対して富山高「せいしゅんは」、芝園中「かけんかな」に対して富山高「ゆきは燃えて」がほとんど同じである。山田が富山県を代表する2校の校歌に

<sup>49</sup> 広田宙外『音楽遍歴とつれづれの記』（1993年）、92～93p

同じモチーフを用いたのは偶然によるものなのか、意識的だったものなのかは不明である。

富山市立芝園中学校校歌 冒頭部分 ※原曲はト長調

あかるく、清く (M.M. ♩ = 84)

たて やま の、あ を ぐ も の、ぞ み

富山県立富山高等学校校歌 最後の部分

れ ら わ - れ - ら - と や ま ご う - - ご う -

富山市立芝園中学校校歌 最後の部分

に、 - へ い わ の、 - に じ を、 - か - け - ん か - な

富山県立富山高等学校校歌 前半部分と後半部分

せ い しゅん - は - は - ゆ - き は 燃 え - て -



現在、富山市立芝園小学校と芝園中学校は同じ校舎を用いており、校歌も同じである。いずれにしても、富山市立芝園小学校を経て富山市立芝園中学校、県立富山高等学校へと進学する生徒は、12年間の長きにわたって山田耕筈による類似のモチーフをもつ校歌を歌うわけで、ある意味で大変幸福な生徒といえるかもしれない。

私立藤園高等女学校の前身、富山実科女学校は、西本願寺大谷光照門主の成婚記念事業として1936（昭11）年に創設された。山田耕筈による校歌は制定年不詳であるが、1939（昭14）年に藤園高等女学校と名称を変更してからの制定である。以降藤園女子高等学校、富山女子高等学校と校名が変更されても歌い継がれた。作詞者は浄土真宗本願寺派門主夫人・大谷嬉子である。なお、1993（平5）年に共学となり、校名も龍谷富山高等学校になったのを契機に、1999（平11）年に大前哲による新校歌が制定された。

山田耕筈は、東京都本郷区森川町9番地に生まれ、幼年時代を横須賀、築地外国人居留地で過ごした。姉の恒はエドワード・ガントレットに嫁ぎ、キリスト教婦人矯風会会頭となった人物である。山田は、横須賀での様子を次のように記している。

「二つから七つまで、私は横須賀にいた。私の姉たちはミッションスクールで学んでいた。兄も熱心な日曜学校の教師で、禁酒会の会員でもあった。家にはヴァイオリンもあり、オルガンもあった。家庭で唱われる歌は、主として賛美歌であった。それも、ありふれた賛美歌ではなかった。多くは、やや高尚な英語の賛美歌であった。」<sup>50</sup>

横須賀から東京都芝に転居した山田は、啓蒙小学校というクリスチャン系の学校に入学する。また、築地外国人居留地では、賛美歌とオルガンの調べに包まれて生活し、周囲にはピアノの音が聞こえてくる家もあったという。山田の受洗は、1900（明13）年6月3日、敷寄屋橋教会においてである。

山田が仏教に傾倒していく契機になったのは、ハワイでの出来事がきっかけだった。すでにそれ以前、ドイツ留学中にニーチェに傾倒し、キリスト教に対し反逆的になっていたという。

1917（大6）年秋、山田はアメリカに向けて日本郵船の‘ペルシャ丸’に乗船し、高熱を発する。薬も効かない状態からようやく脱した山田は、骨と皮ばかりになってホノルルで下船する。そこへYMCM関係団体から歓迎会の招待を受ける。断れきれずに出席すると感想を求められ、演奏まで求められた山田は、すっかりキリスト教徒に対して反感をもつようになる。その後、仏教に興味をもつようになり、仏教関係の書物を読み漁るようになる。そのうちに、父方の祖先が禅宗の僧侶だったことを知る。

その後山田は、仏教に関係する歌曲を次々と発表し、1933（昭8）年に龍谷大学校歌、1935（昭10）年に本願寺派の京都女子高等専門学校校歌、『築地本願寺讃頌歌』を作曲している。1937（昭12）年には、相愛女子専門学校に音楽科が開設され、顧問に就任している。<sup>51</sup> 富山実科女学校が藤園高等女学校に名称変更されたのは1939（昭14）年であるから、校歌の作曲もこの時期であり、山田と仏教との関わりの中で生み出されたものであることがわかる。

<sup>50</sup> 山田耕筈『はるかなり青春のしらべ』（1986年、株式会社かのう書房）、12p

<sup>51</sup> 飛鳥寛栗『それは仏教唱歌から始まった』（1999年、株式会社 樹心社）、83～93p

滑川市・早月加積尋常小学校の校歌が制定された頃とされる 1904（明 37）年当時、記録<sup>52</sup>が正確であれば山田は 18 歳になっていたはずである。この年は、1 月に母が逝去、3 月に関西学院の本科 2 年を卒業、9 月に東京音楽学校予科に入学した年である。後藤暢子は、山田の‘作品 1’は 1901（明 34）年または翌年とする。そして、1916（大 5）年の『第十九回演奏会 ヤマダアーバンド』の解説で、「私が始めて作曲と云ふものを試したのは此頃の事でした。それは丁度私の十七八才の頃で、二十小節にも足りない合唱曲でした」と記されているとする。<sup>53</sup> 作詞者の川崎清男は安田銀行を経て富山県公安委員となった人物で、山田とは友人関係であったということである。父の川崎清は早月加積尋常小学校の初代校長だった。<sup>54</sup> 制定年が事実であれば、山田の最も初期の作品ということになる。

市立富山工業学校の創立は 1916（大 5）年で、1939（昭 14）年に県立富山工業学校になるまで山田作曲の校歌が歌われた。制定年不詳であるが、この期間のどこかであるはずである。しかし、山田は 1917（大 6）年 12 月からアメリカに滞在し、1919（大 8）年 4 月帰国の途に就いているから、この期間は外して考えるべきであろう。

#### c. 信時潔

信時潔（1887～1965）は、大阪府出身の作曲家である。代表作には、『海ゆかば』がある。県内高等学校では、1 校の校歌を作曲している。（ ）は作詞者である。

1965(昭 40)年 78 歳 高岡市・二上工業高等学校（土岐善麿）※現高岡工芸高

#### d. 弘田龍太郎

弘田龍太郎（1892～1952）は、高知県安芸市出身の作曲家である。代表作には、『浜千鳥』『叱られて』などがある。県内の新制高等学校では、1 校の校歌を作曲している。（ ）は作詞者である。

1932(昭 7)年 40 歳 旧西砺波郡福光町・現南砺市・福光高等女学校（第 1 回卒業生）  
※現南砺福光高

1940(昭 15)年 48 歳 旧新湊市・現射水市・新湊高等女学校（相馬御風）※現新湊高

1950(昭 25)年 58 歳 砺波市・出町高等学校（室生犀星）※現砺波高（現行と同曲）

#### e. 大中寅二

大中寅二（1896～1982）は、東京都出身の作曲家・オルガン奏者である。代表作には『椰子の実』がある。県内では、1 校の校歌を作曲している。作曲家・大中恩は子息である。（ ）は作詞者である。

1959(昭 34)年 63 歳 砺波市・砺波女子高等学校（尾島庄太郎）※現となみ野高

#### f. 池内友次郎

池内友次郎（1906～1991）は、東京都出身の作曲家である。県内高等学校では、1 校の校歌を作曲している。（ ）は作詞者である。

1950(昭 25)年 44 歳 旧東砺波郡福野町・現南砺市・福野高等学校（土岐善麿）  
※現南砺福野高

<sup>52</sup> 早月川風土記の会『早月川風土記』（2008 年、早月川風土記の会）、108p

<sup>53</sup> 後藤暢子『山田耕筰』（2014 年、株式会社 ミネルヴァ書房）、38～39p

<sup>54</sup> 松井庄二『早月加積郷土誌』（1985 年）、54～55p

## g. 服部良一

服部良一（1907～1993）は、大阪府出身で、和製ポップス史に多大な貢献があった作曲家である。県内では1校を作曲している。作詞者の‘西條八十’の項（29p）で、その経緯を記した。

1950(昭25)年 43歳 富山中部高等学校（西條八十）

## h. 長谷川良夫

長谷川良夫（1907～1981）は、東京都出身の作曲家である。著書に『作曲法教程』『大和声学教程』『対位法』などがある。県内では、3校の校歌を作曲している。（ ）は作詞者である。

1949(昭24)年 42歳 氷見市・氷見高等学校（土岐善麿）

1951(昭26)年 44歳 黒部市・桜井高等学校（西條八十）

1958(昭33)年 51歳 高岡市・高岡女子高等学校（志田延義）※現高岡西高

## i. 古関裕而

古関裕而（1909～1989）は、福島市出身の作曲家である。代表作には、『大阪タイガースの歌』『露営の歌』『巨人軍の歌』『ああ栄冠は君に輝く』『東京オリンピック行進曲』などがある。県内高等学校では、1校の校歌を作曲している。作曲の依頼は、北日本新聞を通してなされた。<sup>55</sup>（ ）は作詞者である。

1950(昭25)年 41歳 高岡市・高岡北部高等学校（中山輝）※現伏木高（現行と同曲）

## j. 平井康三郎

平井康三郎（1910～2002）は、高知県出身の作曲家である。本名は保喜。代表作には、『平城山』『日本の笛』などがある。県内では、4校の校歌を作曲している。（ ）は作詞者である。

1948(昭23)年 38歳 旧射水郡小杉町・現射水市・小杉高等学校（土岐善麿）

※本名‘保喜’で作曲

1951(昭26)年 41歳 高岡市・高岡工芸高等学校（松坂直美）※本名‘保喜’で作曲

1953(昭28)年 43歳 氷見市・有磯高等学校（室生犀星）

1959(昭34)年 49歳 高岡市・高岡第一高等学校（土岐善麿）

## k. 松本民之助

松本民之助（1914～2004）は、京都市出身の作曲家である。県内高等学校では、3校の校歌を作曲している。松本清・富山大学教授は子息である。（ ）は作詞者である。

1961(昭36)年 47歳 旧東砺波郡井波町・現南砺市・井波高等学校（大島文雄）

※現南砺福野高

1962(昭37)年 48歳 富山市・北日本電波高等学校（大島文雄）※現高朋高

1963(昭38)年 49歳 魚津市・魚津工業高等学校（藪田義雄）

## l. 石桁真礼生

石桁真礼生（1915～1996）は、和歌山県出身の作曲家である。県内高等学校では、1校の校歌を作曲している。（ ）は作詞者である。

1964(昭39)年 49歳 富山市・富山女子短期大学付属高等学校（大島文雄）

※現富山国際大付属高（富山短大、富山国際大と同曲）

<sup>55</sup> 富山県立伏木高等学校『50年のあゆみ』（1977年、富山県立伏木高等学校）、63p

### m. 中田喜直

中田喜直（1923～2000）は、東京都出身の作曲家である。代表作には、『夏の思い出』『小さい秋みつけた』『雪の降る街を』などがある。県内高等学校では、2校の校歌を作曲している。（ ）は作詞者である。

1968(昭43)年 45歳 魚津市・新川女子高等学校（新川和江）※現新川みどり野高

1976(昭51)年 53歳 高岡市・高岡南高等学校（谷川俊太郎）

### n. 團伊玖磨

團伊玖磨（1924～2001）は、東京都出身の作曲家である。代表作には『歌劇「夕鶴」』、『祝典行進曲』、『童謡「ぞうさん」』、『童謡「おつかいありさん」』、『童謡「やぎさんゆうびん」』などがある。全国の校歌を多数作曲したことで知られるが、県内でも多くの校歌を作曲しており、高等学校は6校を数える。（ ）は作詞者である。

1952(昭27)年 28歳 魚津市・魚津高等学校（藤島宇内）

高岡市・高岡高等学校（堀口大學）

（『歌劇「夕鶴」』、『ぞうさん』）

1953(昭28)年 29歳 富山市・富山商業高等学校（堀口大學）

1957(昭32)年 33歳 富山市・富山女子高等学校（大島文雄）※現富山いずみ高

1961(昭36)年 37歳 旧上新川郡大沢野町・現富山市・大沢野工業高等学校（大島文雄）

※現富山工業高

1976(昭51)年 52歳 富山市・富山南高等学校（大島文雄）

高岡高等学校の校歌制定時の経緯に関しては、‘堀口大學’の項（30～32p）に記したが、旋律に関して次のようなエピソードが伝えられている。

当時音楽科教諭だった花井吉三郎（昭23.9～38.3 在職）が、大好きだったショパンの曲を旋律に入れてほしいと團伊玖磨に頼んだという。團は、ショパンの数ある作品の中からピアノ独奏曲〈幻想即興曲 嬰ハ短調〉を選び、その中間部の旋律を組み込んで校歌の旋律を作った。確証はないが、両者の旋律は驚くほどよく似ている。

ショパン〈幻想即興曲 嬰ハ短調〉※移調譜

Moderato cantabile

sotto voce

p

rit.

富山県立高岡高等学校校歌冒頭部分

Tempo di marcia

mf

あ おぞらめざす あ こ が れ - に

た か き - た て や ま あ め そ - そ り わ か

o. 大中恩

大中恩（1924～）は、東京都出身の作曲家である。代表作には、『サッチャン』などがある。父は作曲家の大中寅二、従兄弟に作家の阪田寛夫がいる。県内高等学校では、1校の校歌を作曲している。（ ）は作詞者である。

1964(昭39)年 40歳 富山市・富山東高等学校（村上元之輔）

作詞者の村上元之輔は初代校長で、大中恩の中学時代の恩師だった。

p. 萩原英彦

萩原英彦（1933～2001）は、東京都出身の作曲家である。合唱作品で知られ、代表作には『光る砂漠』『白い木馬』などがある。県内高等学校では、1校の校歌を作曲している。（ ）は作詞者である。

1985(昭60)年 52歳 富山市・水橋高等学校（林勝次）

q. 池辺晋一郎

池辺晋一郎（1943～）は、茨城県水戸市出身の作曲家である。県内では、統合された富山高

等専門学校の校歌を作曲している。( )は作詞者である。

2009(平 21)年 66歳 富山高等専門学校(片岡輝)

#### r. 鈴木憲夫

鈴木憲夫(1953～)は、宮城県出身の作曲家である。合唱曲の作曲家で知られ、『未来への決意』『地球に寄り添って』などがある。県内高等学校では、1校の校歌を作曲している。( )は作詞者である。

2002(平 14)年 49歳 富山市・富山いずみ高等学校(片岡輝)

### 3. 特別支援学校

#### (1) 作詞者

##### ア. 教育関係者

黒部市出身で富山県教育委員長を務めた国香正道がしらとり養護学校・現しらとり支援学校の校歌を作詞している。また、高岡高等支援学校の校歌は、初代校長の海苔由宏が作詞している。

##### イ. 大学教授

富山大学名誉教授で、富山市教育委員長を務め、県内の数多くの校歌を作詞した大島文雄は、富山養護学校・現富山総合支援学校と高岡市立こまどり養護学校・現こまどり支援学校の校歌を作詞している。

##### ウ. 当該校

県内の支援学校の校歌は、当該校による作詞が多い。にいかわ養護学校・現にいかわ総合支援学校、高岡養護学校・現高岡支援学校、となみ養護学校・現となみ総合支援学校、高志養護学校・現高志支援学校、富山高等支援学校が当該校の作詞である。このうち、高岡養護学校・現高岡支援学校は、作曲も当該校である。

#### (2) 作曲者

##### ア. 教育関係者

にいかわ養護学校・現にいかわ総合支援学校は、同校教諭だった西野茂の作曲である。また、となみ学園分校・現となみ東支援学校は、庄川中学校教諭だった根井尚一の作曲である。

##### イ. 大学教授

富山大学名誉教授で、県内の校歌を数多く作曲した黒坂富治が、富山養護学校・現富山総合支援学校の校歌を作曲している。また、富山大学名誉教授の大澤欽治が、高岡ろう学校・現高岡聴覚総合支援学校及びとなみ養護学校・現となみ総合支援学校の校歌を作曲している。高岡高等支援学校の校歌は、金沢大学准教授の浅井暁子の作曲である。

##### ウ. 県内在住音楽関係者

しらとり養護学校・現しらとり支援学校は、富山アカデミー女声合唱団指揮者の池田祐孝が作曲している。また、富山高等支援学校は、シンガーソングライターで県内企業等のPRソングを数多く手がけている高原兄の作曲である。

##### エ. 中央楽壇の作曲家

中学生むけの合唱曲を数多く作曲した渡辺節保が、ふるさと養護学校・現ふるさと支援学校の校歌を、高岡市出身の室崎琴月が高岡市立こまどり養護学校・現こまどり支援学校の校歌を作曲

している。また、高志養護学校・現高志支援学校の校歌は、作曲家で日劇小劇場音楽監督だった赤星建彦の作曲である。

#### IV 終わりに

旧制学校校歌の作詞者は、当時の校長や教員によるもの、中央文壇の詩人や歌人によるものに分けられる。作詞した教育関係者は、師範学校の厳しい教育課程を経て教員となっているため、校歌を作詞できるだけの教養を備えていたと見ることができる。また、中央文壇の詩人や歌人による校歌からは、校歌をつくるならば見識ある専門家に依頼するべきとする考えがあったと見ることができる。

旧制学校校歌の作曲者は、教育関係者によるものが少ない。師範学校教員によるものも、富山師範学校・富山高等女学校教諭だった古瀬紋吉、富山師範学校教員だった荒木得三のみである。それらを除くと、中央楽壇で活躍した大学教授・作曲家によるものが多い。

新制高等学校になると、作詞者は教育関係者もいるが小学校や中学校ほどではない。県内詩人によるものも少ないが、富山大学名誉教授で、富山市教育委員長を務め、県内の校歌を数多く作詞した大島文雄によるものがある程度数がある。そのほかは、中央文壇の詩人によるものが非常に多い。

新制高等学校校歌の作曲者は、教育関係者はほとんどなく、県内在住の作曲家によるものが若干見られる。また、富山大学名誉教授の黒坂富治、小澤慎一郎、富山大学教授の松本清によるもの、富山県ゆかりの大学教授である福井直秋、橋本秀次、森川隆之によるものが見られる。中央楽壇の作曲家によるものは、岩河三郎、梁田貞、山田耕筰、信時潔、弘田龍太郎、大中寅二、池内友次郎、服部良一、長谷川良夫、古関裕而、平井康三郎、松本民之助、石桁真礼生、中田喜直、團伊玖磨、大中恩、萩原英彦、池辺晋一郎、鈴木憲夫と、そうそうたる顔ぶれが並んでいる。

特別支援学校の校歌の作詞は、教育関係者によるもの、大学教授によるものが若干見られるが、当該校によるものが多い。

特別支援学校の校歌の作曲者は、教育関係者、大学教授、中央楽壇の作曲家によるものがあり、特徴として指摘できるものはない。

以上、小学校と中学校について作詞者と作曲者の特徴を明らかにしてきたが、今回、旧制学校、新制高等学校、特別支援学校について特徴を明らかにできたことは意義深いものとする。

#### 〈参考文献〉

- ・布村安弘『富中回顧録』（1950年、富山中学校同窓会）
- ・荒木得三先生頌徳会『荒木得三先生』（1956年、富山大学教育学部）
- ・福井直秋伝記刊行会『福井直秋伝』（1969年）
- ・上市町誌編纂委員会『上市町誌』（1970年）
- ・神通中学校・富山中部高校五十年史編集委員会『神通中学校・富山中部高校五十年史』（1970年、富山県立富山中部高等学校）
- ・富山県創立百周年誌編集委員会『母校創立百周年記念誌』（1973年、富山教育学窓会）
- ・富山県立伏木高等学校『50年のあゆみ』（1977年、富山県立伏木高等学校）

- ・小澤達三『富山県校歌全集』、(1979年、パラマウント社)
- ・小澤達三『富山県校歌全集 余滴』、(1979年、パラマウント社)
- ・七十年史校史編纂委員会『七十年史』(1979年、富山県立砺波高等学校砺波同窓会)
- ・大島文雄「校歌を作る」～『随筆集 萩咲きぬ』(1979年)
- ・記念誌編集委員会『二十五年の歩み』(1984年、高岡第一学園)
- ・富山県立高岡南高等学校『十年史』(1984年)
- ・富山高等学校創校百周年記念事業後援会『富中富高百年史』(1985年)
- ・富山新聞社報道局『清き神通の流れに』(1985年、富山新聞社)
- ・松井庄二『早月加積郷土誌』(1985年)
- ・富山県立新川女子高等学校『二十年のあゆみ』(1986年)
- ・山田耕筈『はるかなり青春のしらべ』(1986年、株式会社かのう書房)
- ・富山県立上市高等学校『七十年史』編集委員会『七十年史』(1989年、富山県立上市高等学校同窓会)
- ・富山市立藤ノ木中学校『創校記念誌「礎」』(1989年)
- ・小澤慎一郎先生を偲ぶ会『小澤慎一郎先生を偲ぶ演奏会プログラム』(1991年6月16日、富山市民プラザ アンサンブルホール)
- ・大島文雄先生追想録刊行会編『大島文雄先生追想録』(1992年、岩波ブックサービスセンター)
- ・小松崎兵馬『浦和の校歌』(1992年、さきたま出版会)
- ・広田宙外『音楽遍歴とつれづれの記』(1993年)
- ・富山県立高岡高等学校100年史編集準備委員会『母校回顧第2集』(1993年)
- ・氷見市教育委員会『氷見のうた』(1995年、氷見市教育委員会)
- ・浅見雅子・北村眞一『校歌 心の原風景』(1996年、学文社)
- ・富山県立新川女子高等学校『三十年のあゆみ』(1996年)
- ・富山県立富山商業高等学校創立百周年記念事業実行委員会『富商百年史』(1997年)
- ・富山県立高岡高等学校百年史編集委員会『高岡中学・高岡高校百年史』(1999年、富山県立高岡高等学校創立百周年記念事業後援会)
- ・飛鳥寛栗『それは仏教唱歌から始まった』(1999年、株式会社 樹心社)
- ・佐々木正太郎『岩手の校歌ものがたり』(2000年、ツーワンライフ)
- ・チューリップテレビ『越中人譚 校歌』(2003年)
- ・鈴木恵一『岡野貞一とその名曲』(2005年)
- ・折原昭彦『校歌の風景—中越地区小中校歌論考 増補版』(2006年、野島出版)
- ・御風会『会報第17号』(2007年5月)～蛭子健治「御風と富山—校歌の作詞、交流の人物等」
- ・太田久夫「与謝野夫妻古城公園散歩」～同『続古城の杜 郷土雑纂第四集』(2006年)
- ・間々田和彦&名取太郎『岡野貞一作曲校歌一覧』(2006年、筑波大学附属盲学校)
- ・宮下舜爾・高岡市史編さん室『高岡市史「現代編」編さんノート 音楽』(2006年)
- ・早月川風土記の会『早月川風土記』(2008年、早月川風土記の会)
- ・室生犀星記念館『犀星校歌集』(2008年)
- ・富山県ひとつづくり財団・富山県教育記念館編『校名・校章・校歌と教育への期待』(2010年、



未出版)

- ・ 早月川風土記の会『早月川風土記』(2008年、早月川風土記の会)
- ・ 渡辺裕『歌う国民 唱歌、校歌、うたごえ』(中公新書、2010年、中央公論新社)
- ・ 興南中学校創校三十周年記念誌編集部会『興南中学校創校三十周年記念誌』(2012年)
- ・ 立山町教育センター・立山区域小学校教育協議会『立山区域小・中学校 校歌集』(2013年)
- ・ 堀江英一『富山県の小学校校歌をつくった人たち～作詞者及び作曲者の観点から』～『富山国際大学子ども育成学部紀要第5巻』(2014年)
- ・ 後藤暢子『山田耕筰』(2014年、株式会社 ミネルヴァ書房)
- ・ 糸魚川民俗資料館《相馬御風記念館》『相馬御風作詞曲一覧』(2015年)
- ・ 堀江英一『富山県の中学校校歌をつくった人たち～作詞者及び作曲者の観点から』～『富山国際大学子ども育成学部紀要第7巻』(2016年)

〈資料〉県内旧制学校・新制高等学校・特別支援学校校歌作詞・作曲家一覧（小澤達三『富山県校歌全集』のデータを元に堀江が加筆・修正して作成）

No.	市町村名	現学校名	開校	旧学校名	制定	作詞者	出身地	経歴	作曲家	出身地	経歴
1	下.朝日町	泊	1948	(改組)	1949	中山 輝	立山町福田	詩人・北日本新聞社代表取締役	黒坂 富治	朝日町泊	富山大名誉教授
2	同		1943	泊高女(改称)	1944	田中 覚秀		当時の教諭	田中 覚秀		当時の教諭
3	同		1940	泊実科高女							
4	下.入善町	入善	1948	(改組)	1951	大木 惇夫	広島市	詩人・本名軍一・「大地讃頌」	橋本 秀次	入善町新屋	金沢大初代音楽科教授
5	同		1927	入善農学校(甲種)	不詳	不詳			中田 章	東京都	作曲家・喜直は子・「早春賦」
6	同		1922	入善農学校(乙種)							
7	黒部市	桜井	1948	(改組)	1951	西條 八十	東.牛込区	詩人・夫人は黒.若栗出身	長谷川良夫	東京都	作曲家・東京芸術大教授
8	同		1941	県農業学校							
9	同		1922	三日市農業学校	1940	吉沢 庄作	魚.西布施	俳人・旧制魚津中教諭	福井 直秋	上市町江上	武蔵野音大設立・初代学長
10	同		1909	郡立農業学校							
11	魚津市	魚津	1948	(改組)	1952	藤島 宇内	兵庫県	詩人・評論家	團 伊玖磨	東京都	作曲家・「夕鶴」「ぞうさん」
12	同		1901	魚津中学	1921	竹内 保治	入善町	魚津中出身・東京帝大図書館	福井 直秋	上市町江上	武蔵野音大設立・初代学長
13	同		1899	第三中学							
14	同		1948	魚津女子(改組)1948							
15	同		1921	魚津高女	1923	松本勝太郎		校歌全集の松原ヌイは誤り	福井 直秋	上市町江上	武蔵野音大設立・初代学長
16	同		1936	魚津実業学校 1948	1939	相馬 御風	新.糸魚川市	詩人 1939年に作曲依頼	乗杉 嘉寿	砺.杉木本町	東京音楽学校学長
17	同	魚津工業	1962		1963	藪田 義雄	神.小田原	白秋門下詩人・日本文芸協会会員	松本民之助	京都市	作曲家・松本清富大教授は子
18	同	新川みどり野	2003		2001	奥野 耕平		新川女子高教頭(国語)	佐藤 進	城端町	作曲家・富山市中学校長歴任
19	同	(2000年閉校)	1967	新川女子	1968	江間 章子	新.高田市	詩人・作詞家・「夏の思い出」	中田 喜直	東京都	作曲家・「夏の思い出」
20	滑川市	滑川	2010	(海洋と統合)	不詳	北園 克衛	三重県	詩人・日本歯科大学図書館長	岡部 昌		東邦音大勤務・高校教科書著作
21	同		1948	滑川(改称)							

No.	市町村名	現学校名	開校	旧学校名	制定	作詞者	出身地	経歴	作曲者	出身地	経歴
22	滑川市		1948	滑川女子(改組)	1937	高柳林太郎	富山市	福光高女校長等歴任・在職時	福井 直秋	上市町江上	武蔵野音大設立・初代学長
23	同		1923	↑滑川高女(改称)							
24	同		1913	↑滑川実科高女							
25	同	(1944年廃止)	1924	滑川商業学校	不詳	池館 速雲	富. 三郷	水橋中初代校長・水橋町教育長	名和 君代		
26	同	(1946年廃止)	1944	滑川工業学校	不詳	高見 裕之			川原 真之		
27	同		1948	↑水橋 1948(改称)							
28	同		1942	水橋商業学校(改称)	不詳	相馬 御風	新. 糸魚川市	詩人・「春よこい」「早大校歌」	不詳		
29	同		1935	水橋実業学校							
30	同		2000	↑海洋 2010	1948	高島 高	滑川市	詩人・医師	黒坂 富治	朝日町泊	富山大名誉教授
31	同		1948	水産(改称)							
32	同		1900	水産学校							
33	中. 上市町	上市	1948	(改組)	1950	中山 輝	立山町福田	詩人・北日本新聞社代表取締役	黒坂 富治	朝日町泊	富山大名誉教授
34	同		1940	上市農林学校(改称)	1923	土井 晩翠	富. 仙台市	詩人・英文学者・「荒城の月」	岡野 貞一	鳥取県	作曲家・「故郷」「朧月夜」
35	同		1934	↑上市農学校(改称)							
36	同		1920	↑中新農業学校							
37	同		1943	上市高女(改称)	1932	藤田 健次	立山町	民謡詩人・著書「立山しぐれ」	平岡 均之	秋田県	作曲家・「若葉」
38	同		1924	↑上市実科高女							
39	中. 立山町	雄山	1948		1949	尾上 八郎	岡. 津山市	歌人・日本書道芸術院会長	小出 浩平	新潟県	東邦音短大教授
40	富山市	中央農業	1969	(改称)	1966	大島 文雄	富. 覚中町	富大名誉教授・富山市教育委員長	黒坂 富治	朝日町泊	富山大名誉教授
41	同		1961	富山産業高(改称)							
42	同		1958	富山通信産業							
43	富. 旧八尾町	八尾	1948	(改組)	1950	藤村 作	福. 柳川	東京大教授・武蔵野学園理事	福井 直秋	上市町江上	武蔵野音大設立・初代学長

No.	市町村名	現学校名	開校	旧学校名	制定	作詞者	出身地	経歴	作曲者	出身地	経歴
44	富.旧八尾町		1944	八尾高女(改称)	不詳	清水 徳義	婦. 宮川村	小学校長歴任・宮川村長	白川 薫		
45	同		1924	八尾実科高女(改称)							
46	同		1922	八尾女子技芸学校							
47	富.旧婦中町	富山西	1976	(改称)	1930	相馬 御風	新. 糸魚川市	詩人・「春よこい」「早大校歌」	片山 穎太郎	大阪府	和歌山大・大阪音大教授・作曲家
48	同		1970	婦負(改称)							
49	同		1951	婦負農業(改称)							
50	同		1948	婦負(改組)							
51	同			↑西部 1948							
52	同		1924	婦負農学校	1930	相馬 御風	新. 糸魚川市	詩人・「春よこい」「早大校歌」	片山 穎太郎	大阪府	和歌山大・大阪音大教授・作曲家
53	富山市	富山	1953	(改称)	1953	大島 文雄	富. 覚中町	富大名誉教授・富山市教育委員長	山田 耕筈	東京都	作曲家・「赤とんぼ」「この道」
54	同		1948	南部(改称)							
55	同		1948	富山(改組)							
56	同		1885	富山中学	1910	吉竹 熊治		旧制富山中学漢文教諭	古瀬 紋吉	東. 北般若村	富山女子師範・県立富山高女教諭
						大日方退蔵	福岡県	旧制富山中教諭・福岡県中校長			
57	同	富山中部	1948	(改称)	1950	西條 八十	東. 牛込区	詩人・夫人は黒. 若栗出身	服部 良一	大阪府	作曲家・日本作曲家協会理事長
58	同		1948	神通(改組)							
59	同		1920	神通中学	1921	不詳			不詳		
60	同	富山北部	1948	(統合)	1951	大島 文雄	富. 覚中町	富大名誉教授・富山市教育委員長	荒木 得三	城端町	富山師範教諭・県下音楽界に貢献
61	同		1948	富山北部(改組)							
62	同		1946	岩瀬商業学校(改称)							
63	同		1944	岩瀬女子商業学校							
64	同		1940	岩瀬商業学校(改称)							

No.	市町村名	現学校名	開校	旧学校名	制定	作詞者	出身地	経 歴	作曲者	出身地	経 歴
65	富山市		1936	東岩瀬商業学校(改)	不詳	不 詳			不 詳		
66	同		1935	東岩瀬実業青年学校							
67	同		1930	東岩瀬実業専修学校							
68	同		1916	東岩瀬実業補習学校							
69	同		1948	富山菓業(改組)	不詳	相馬 御風	新. 糸魚川市	詩人・「春よこい」「早大校歌」	中山 晋平	長. 中野市	作曲家・「シャボン玉」「船頭小唄」
70	同		1945	化学工業学校(改称)							
71	同		1933	富山菓業学校(改称)							
72	同		1927	富山菓業学校							
73	同	富山工業	2010	(大沢野工業を統合)	1952	藤村 作	福. 柳川	東京大教授・武蔵野学園理事	福井 直秋	上市町江上	武蔵野音大設立・初代学長
74	同		1951	富山工業(改称)							
75	同		1950	富山西部							
76	同		1939	県立富山工業学校	不詳	土井 晚翠	宮. 仙台市	詩人・英文学者・「荒城の月」	永井 建子		
77	同		1916	市立富山工業学校	不詳	相馬 御風	新. 糸魚川市	詩人・「春よこい」「早大校歌」	山田 耕筰	東京都	作曲家・「赤とんぼ」「この道」
78	同	(北部高へ)	1945	化学工業学校	不詳	相馬 御風	新. 糸魚川市	詩人・「春よこい」「早大校歌」	中山 晋平	長. 中野市	作曲家・「シャボン玉」「船頭小唄」
79	同		1933	富山菓業学校							
80	同		1927	富山菓業学校							
81	同		1948	富山西部女子							
82	同		1945	↑富山第二高女							
83	同		1948	婦負							
84	同		1924	↑婦負農学校	1930	相馬 御風	新. 糸魚川市	詩人・「春よこい」「早大校歌」	片山 穎太郎	大阪府	和歌山大・大阪音大教授・作曲家
85	同	(富工より独立)	1961	大沢野工業	1961	大島 文雄	富. 覚中町	富大名誉教授・富山市教育委員長	團 伊玖磨	東京都	作曲家・「夕鶴」「ぞうさん」
86	同	富山商業	1953	(改称)	1953	堀口 大學	東. 本郷区	詩人・歌人・「月光とピエロ」	團 伊玖磨	東京都	作曲家・「夕鶴」「ぞうさん」

No.	市町村名	現学校名	開校	旧学校名	制定	作詞者	出身地	経歴	作曲者	出身地	経歴
87	富山市		1950	富山東部(改称)							
88	同		1948	富山商業(改組)							
89	同		1899	富山商業学校(改称)	1908	池辺 義象	熊本県	歌人・帝室博物館員・京大講師	楠美恩三郎	青森県	東京音楽学校教授・作曲家
90	同		1897	富山簡易商業学校							
91	同		1948	↑富山南部							
92	同	富山いずみ	2002	(改称・共学)	2002	片岡 輝	大連	詩人・東京家政大学長	鈴木 憲夫	宮城県	作曲家・「未来への決意」
93	同		1948	富山女子(改組)	1957	大島 文雄	富. 覚中町	富大名誉教授・富山市教育委員長	團 伊玖磨	東京都	作曲家・「夕鶴」「ぞうさん」
94	同		1907	富山高女(改称)	1923	折口 信夫	大阪府	歌人・詩人・民俗学者	岡野 貞一	鳥取県	作曲家・「故郷」「朧月夜」
95	同		1901	県高女							
96	同	富山東	1962		1964	村上元之輔		県内高校長歴任・初代校長	大中 恩	東京都	作曲家・村上元之輔の教え子
97	同	富山南	1974		1976	大島 文雄	富. 覚中町	富大名誉教授・富山市教育委員長	團 伊玖磨	東京都	作曲家・「夕鶴」「ぞうさん」
98	同	水橋	1983		1985	林 勝次	石. 金沢市	富山大学学長・富大附中校長	萩原 英彦	東京都	作曲家・武蔵野音大教授
99	同	呉羽	1983		1984	池谷 清一		初代校長	岩山真理子	大阪市	新姓茂木・東京芸大非常勤講師
100	同	雄峰	1948	(改組)	1949	山森 利栄	富. 呉羽	山森製鎖社長・同校在職時作詞	渡辺 貞之	岡. 笠岡市	県立神通中学教諭
101	同		1943	雄峰中(改称)							
102	同		1937	県立夜間中							
103	同		1929	私立富山中等夜学							
104	射.旧小杉町	小杉	1995	(総合学科開設)	1950	土岐 善麿	東. 浅草	歌人	平井 保喜	高知県	作曲家・康三郎の本名・「平城山」
105	同		1948	(改組)							
106	同		1938	小杉農学校(改称)	1923	相馬 御風	新. 糸魚川市	詩人・「春よこい」「早大校歌」	福井 直秋	上市町江上	武蔵野音大設立・初代学長
107	同		1922	小杉農業公民(改称)							
108	同		1919	射水農業公民							

No.	市町村名	現学校名	開校	旧学校名	制定	作詞者	出身地	経歴	作曲者	出身地	経歴
109	射.旧大門町	大門	1986		1989	平田 卓郎		初代校長	山本 淳	茨城県	吹奏楽作曲家の長生淳と同人物
110	射.旧新湊市	新湊	1951	(改称)	1949	三浦孝之助	東.世田谷区	県内高等学校校長歴任	宮下 舜爾	樺太	作曲家・北日本放送社長室長
111	同		1948	高岡東部(改組)							
112	同		1927	射水中学	1930	大坪 国益	東.世田谷区	県内中学教諭・立川短大校長	関本駒之助	和歌山県	旧制射水中・魚津中教諭・在職時
113	同		1940	↑新湊高女 1941	1940	相馬 御風	新.糸魚川市	詩人・「春よこい」「早大校歌」	弘田龍太郎	高知県	作曲家・「叱られて」「春よこい」
114	高岡市	高岡	1953	(改称)	1952	堀口 大學	東.本郷区	詩人・歌人・「月光とピエロ」	團 伊玖磨	東京都	作曲家・「夕鶴」「ぞうさん」
115	同		1948	高岡中部(改称)							
116	同		1948	①高岡(改組)							
117	同		1901	高岡中学(改称)	1933	相馬 御風	新.糸魚川市	詩人・「春よこい」「早大校歌」	岡野 貞一	鳥取県	作曲家・「故郷」「朧月夜」
118	同				1911	田村 喜作	岡山市	当時の校長・各県旧制中校長歴任	田村 喜作	岡山市	当時の校長・各県旧制中校長歴任
119	同		1899	第二中学(改称)							
120	同		1898	高岡尋常中学							
121	同		1948	↑①高岡東部女子 48							
122	同		1927	市立高岡高女(改称)	1934	與謝野晶子	大.堺市	歌人・作家・思想家	辻 順治		陸軍戸山学校軍楽隊長
124	同		1911	高岡実科高女		不詳			不詳		
125	同	高岡西	1997	(改称・共学)	1997	米田 憲三	南砺.福野町	高等学校校長歴任・立山博物館長	松本 清	東京都	作曲家・富大教授・民之助の子
126	同		1957	高岡女子(改称)	1958	志田 延義	富山市	文学博士・山梨大教育学部長	長谷川良夫	東京都	作曲家・東京芸大教授
127	同		1948	高岡西部(改称)	1948	島村 英男	高岡市	当時の国語科教諭	室崎 琴月	高岡市	作曲家・当時の音楽科担当・「夕日」
128	同			↑高岡商業							
129	同		1948	高岡女子(改組)							
130	同		1907	高岡高女	1927	高野 辰之	長.豊田村	国文学者・「故郷」「朧月夜」	岡野 貞一	鳥取県	作曲家・「故郷」「朧月夜」
131	同	高岡工芸	2012	(二上工業と統合)	1951	松坂 直美	長崎県	筆名青江八郎・児童文芸家	平井 保喜	高知県	作曲家・康三郎の本名・「平城山」

No.	市町村名	現学校名	開校	旧学校名	制定	作詞者	出身地	経歴	作曲者	出身地	経歴
132	高岡市		1950	(分離)	1951	松坂 直美	長崎県	筆名青江八郎・児童文芸家	平井 保喜	高知県	作曲家・康三郎の本名・「平城山」
133	同		1948	高岡中部(改称)							
134	同		1948	高岡工芸(改組)							
135	同		1941	高岡工芸学校(改称)	1894	友田 宣剛	福井県	陸軍士官学校教官・上智大講師	小山作之助	新潟県	作曲家・日本教育音楽協会会長
136	同		1894	工芸学校							
137	同										
138	同		1963	二上工業(分離)2012	1965	土岐 善麿	東. 浅草	歌人	信時 潔	大阪府	作曲家・「沙羅」「海ゆかば」
139	同		1962	高岡工芸二上分校							
140	同	高岡商業	1958	(改称)	1928	相馬 御風	新. 糸魚川市	詩人・「春よこい」「早大校歌」	梁田 貞	北. 札幌市	作曲家・「城ヶ島の雨」「とんび」
141	同		1948	高岡西部(改称)	1948	島村 英男	高岡市	当時の国語科教諭	室崎 琴月	高岡市	作曲家・当時の音楽科担当・「夕日」
142	同		1948	高岡商業(改組)							
143	同		1947	高岡商業併設中学							
144	同		1946	高岡商業学校							
145	同		1944	高岡第二工業学校							
146	同		1901	高岡商業学校	1928	相馬 御風	新. 糸魚川市	詩人・「春よこい」「早大校歌」	梁田 貞	北. 札幌市	作曲家・「城ヶ島の雨」「とんび」
147	同		1899	高岡甲種商業学校							
148	同		1897	高岡簡易商業学校							
149	同	伏木	1957	(改称)	1950	中山 輝	立山町福田	詩人・北日本新聞社代表取締役	古関 裕而	福島市	作曲家・「ああ栄冠は君に輝く」
150	同			(学窓歌)		村上 教俊			宮下 舜爾	樺太	作曲家・北日本放送社長室長
151	同		1948	高岡北部(改称)	1950	中山 輝	立山町福田	詩人・北日本新聞社代表取締役	古関 裕而	福島市	作曲家・「ああ栄冠は君に輝く」
152	同		1948	(改組)							
153	同		1927	伏木商業学校	1929	笹川 祥蔵	新潟市	伏木港工事事務所勤務・公募作	福井 政次	新湊市	新湊中部中校長・当時の音楽科講師



No.	市町村名	現学校名	開校	旧学校名	制定	作詞者	出身地	経歴	作曲者	出身地	経歴
154	高岡市		1946	伏木高女(1948 廃校)							
155	同	高岡南	1974		1976	谷川俊太郎	東. 杉並区	詩人・翻訳家・絵本作家	中田 喜直	東京都	作曲家・「夏の思い出」
156	同		1960	戸出女子(改称)76 廃	不詳	稲垣 俊之	砺波市	高等学校長歴任・井波町教育長	小澤慎一郎	朝日町泊	富大名誉教授・県合唱連盟理事長
157	同		1948	出町(砺波高分校)							
158	同		1948	戸出女子(改組)							
159	同		1943	戸出高女(改称)	1928	鴻巣 盛広	岐. 高山市	第四高等学校教授	岡野 貞一	鳥取県	作曲家・「故郷」「朧月夜」
160	同		1926	戸出実科高女(改称)							
161	同		1911	戸出裁縫女学校							
162	高岡市	志貴野	1968	(改称)	1962	大島 文雄	富. 覚中町	富大名誉教授・富山市教育委員長	宮下 舜爾	樺太	作曲家・北日本放送社長室長
163	同		1961	高岡産業							
164	高.旧福岡町	福岡	1983		1983	青塚 与市	射. 堀岡	詩人・初代校長	上埜 孝	小矢部市	読売日本交響楽団打楽器奏者
165	氷見市	氷見	2010	(有磯と統合)	2012	呉羽 長	長野県	富山大学教授	松本 清	東京都	作曲家・富大教授・民之助の子
166	同		1948	氷見(①と統合)	1949	土岐 善麿	東. 浅草	歌人	長谷川良夫	東京都	作曲家・東京芸大教授
167	同		1927	氷見中学	1929	古山 宗一	富山市	旧制氷見中学教諭	福井 直秋	上市町江上	武蔵野音大設立・初代学長
168	同		1914	氷見高女	不詳	佐藤惣之助	神. 川崎市	詩人・コロムビアレコード専属	橋本 国彦	東京都	作曲家・「お菓子と娘」
169	同				1926	蘆澤 正中	山梨県	当時の教諭	不詳		
170	同		1948	①氷見農業水産(改組)	不詳	不詳			不詳		
171	同		1919	氷見農学校							
172	同		1951	有磯(氷見より独立)	1953	室生 犀星	石. 金沢市	詩人・小説家・姉が伏木港在住	平井康三郎	高知県	作曲家・「平城山」「とんぼのめがね」
173	砺波市	砺波	1952	(改称)	1950	室生 犀星	石. 金沢市	詩人・小説家・「杏っ子」	弘田龍太郎	高知県	作曲家・「叱られて」「春よこい」
174	同		1948	出町							
175	同		1948	↑①砺波 1948							

No.	市町村名	現学校名	開校	旧学校名	制定	作詞者	出身地	経歴	作曲者	出身地	経歴
176	砺波市		1909	砺波中学	1931	吉波 彦作	南砺. 福光	旧制砺波中学校長・教諭在職時	片山頼太郎	大阪府	和歌山大・大阪音大教授・作曲家
177	同		1948	↑①出町 1948							
178	同		1923	出町高女							
179	同			↑①戸出 1948							
180	同	砺波工業	1962	(砺波より独立)	1964	大島 文雄	富. 覚中町	富大名誉教授・富山市教育委員長	小澤慎一郎	朝日町泊	富大名誉教授・県合唱連盟理事長
181	南砺.旧福野	南砺福野	2012	(総合井波と統合)	1950	土岐 善麿	東. 浅草	歌人	池内友次郎	東京都	作曲家・高浜虚子の次男
182	同		2005	南砺総合福野							
183	同		1948	福野(改称)							
184	同		1948	福野農業(改組)							
185	同		1921	福野農学校(改称)	1924	倉橋 惣三	静岡県	お茶の水女子大教授	萩原 英一		東京音楽学校ピアノ科教授
186	同		1898	県農学校(改称)							
187	同		1894	簡易農学校							
188	南砺.旧井波		2005	南砺総合井波 2012	1961	大島 文雄	富. 覚中町	富大名誉教授・富山市教育委員長	松本民之助	京都市	作曲家・松本清富大教授は子
189	同		1960	井波(独立)							
190	同		1949	福野高井波分校							
191	南砺.旧平村	南砺平	2010	(改称)	1971	宮沢 章二	埼. 羽生市	詩人・作詞家	宮下 舜爾	樺太	作曲家・北日本放送社長室長
192	同		2005	南砺総合平(改称)							
193	同		1995	福野高平(独立)							
194	同		1950	福野高平分校							
195	南砺.旧福光	南砺福光	2010	(改称)	1960	高崎 正秀	富山市	歌人・國學院大学文学部長	三界 実義	奄美大島	奄美新民謡の三界稔は兄
196	同		2005	南砺総合福光(改称)							
197	同		1960	福光(独立)							

No.	市町村名	現学校名	開校	旧学校名	制定	作詞者	出身地	経歴	作曲者	出身地	経歴
198	南砺.旧福光		1958	福野高福光分校							
199	同		1928	福光高女(改称)	1932	1回卒業生			弘田龍太郎	高知県	作曲家・「叱られて」「春よこい」
200	同		1923	町立福光実科高女							
201	小矢部市	石動	1948	(改組)	1953	田部 重治	富山市山室	「山と溪谷」執筆	小松 清	秋田県	耕輔弟・作曲家東大・東京芸大教授
202	同		1926	石動高女(改称)	1926	大村 正次	富. 東岩瀬	旧制高岡中学教諭	宇佐見太郎		
203	同		1924	石動実科高女							
204	同	小矢部園芸	1995	(独立)							
205	同		1974	石動高小矢部分校	1968	大島 文雄	富. 覚中町	富大名誉教授・富山市教育委員長	森川 隆之	東. 庄川町	和歌山大教授・大澤欽治と親戚
206	同		1968	小矢部産業							
207	同		1966	富山産業高小矢部教場							
208	同		1960	石動高若林分校							
209	同		1952	砺波高若林分校							
210	同		1951	出町高若林分校							
211	同	となみ野	2001	(改組)	2001	山本 哲也	南砺. 城端	「城端時報」代表	松本 清	東京都	作曲家・富大教授・民之助の子
212	同		1955	砺波女子(改称)	1959	尾島庄太郎	富. 水橋町	文学博士・早大文学部教授	大中 寅二	東京都	作曲家・「椰子の実」・大中恩は子
213	同		1948	津沢(改称)							
214	同		1948	砺波女子(改組)							
215	同		1923	砺波高女	1926	芳賀 矢一	福井市	東大名誉教授・國學院大学長	岡野 貞一	鳥取県	作曲家・「故郷」「朧月夜」
216	富山市	龍谷富山	1993	(改称)	1999	国香 正道	黒部市	富山県教育委員長	大前 哲		作曲家・相愛大学教授
217	同		1967	藤園女子(改称)							
218	同		1951	富山女子(改称)	不詳	大谷 嬉子		西本願寺住職大谷光照夫人	山田 耕筈	東京都	作曲家・「赤とんぼ」「この道」
219	同		1948	藤園女子(改組)							

No.	市町村名	現学校名	開校	旧学校名	制定	作詞者	出身地	経歴	作曲者	出身地	経歴
220	富山市		1950	↑大谷女子	不詳	大谷 嬉子		西本願寺住職大谷光照夫人	山田 耕筈	東京都	作曲家・「赤とんぼ」「この道」
221	同		1939	藤園高女							
222	同		1936	富山実科女学校							
223	同	不二越工業	1947	(改組)	1951	大島 文雄	富. 覚中町	富大名誉教授・富山市教育委員長	荒木 得三	城端町	富山師範教諭・県下音楽界に貢献
224	同		1939	不二越工業学校							
225	同		1937	不二越工科学校							
226	同	富山第一	1959		1963	柚木 武夫	滑川市	高校長歴任・富山女子短大教授	佐藤 進	城端町	作曲家・中学校長歴任
227	同	富山国際大付属	1993	(改称・共学)	1964	大島 文雄	富. 覚中町	富大名誉教授・富山市教育委員長	石桁真礼生	和歌山県	作曲家・石桁冬樹は子
228	同		1964	富山女子短大付属							
229	同	高朋	1978	(改称)	1962	大島 文雄	富. 覚中町	富大名誉教授・富山市教育委員長	松本民之助	京都市	作曲家・松本清富大教授は子
230	同		1969	北日本(改称)							
231	同		1961	北日本電波							
232	同	片山学園	2008		2005	廣瀬 久雄		高校長歴任・開校時の学園長	佐藤 進	城端町	作曲家・中学校長歴任
233	同	星槎国際				宮澤 保夫			さいとう聖子		
234	高岡市	高岡第一	1959		1959	土岐 善麿	東. 浅草	歌人	平井康三郎	高知県	作曲家・「平城山」「とんぼのめがね」
235	同	高岡龍谷	1983	(改称・共学)	1984	高峯 正岡	氷見市	氷見高校長・氷見市光伝寺住職	岩河 三郎	富山市	作曲家・「巢立ちの歌」「木琴」
236	同		1963	清光女子	1963	長田 恒雄	静. 清水市	詩人・評論家	菅野 浩和		作曲家・音楽評論家
237	同	高岡向陵	1981	(改称)	1962	大島 文雄	富. 覚中町	富大名誉教授・富山市教育委員長	室崎 琴月	高岡市	作曲家・中央音楽院設立・「夕日」
238	同		1970	高岡日大(改称)							
239	同		1962	高岡東							
240	魚津市	新川	1980	(独立)	1980	清河 七良	魚. 北山	魚津市長	川名 佑一		洗足学園大学教授
241	同		1973	高岡日大魚津校舎							

No.	市町村名	現学校名	開校	旧学校名	制定	作詞者	出身地	経歴	作曲者	出身地	経歴
242	富山市	富山高専	2009	(富山商船と統合)	2009	片岡 輝	大連	詩人・東京家政大学長	池辺晋一郎	茨.水戸市	作曲家
243	同		1964	富山工専 2009	1974	野路 末吉	石.金沢市	富大工学部長・富山工専校長	小澤慎一郎	朝日町泊	富大名誉教授・県合唱連盟理事長
244	射.旧新湊市		1967	富山商船 2009	1970	大島 文雄	富. 覚中町	富大名誉教授・富山市教育委員長	小澤慎一郎	朝日町泊	富大名誉教授・県合唱連盟理事長
245	同		1951	富山商船高(改組)							
246	同		1939	富山商船学校	1932	伏脇 俊岩		高等小・高女等校長歴任	福井 直秋	上市町江上	武蔵野音大設立・初代学長
247	同		1906	新湊甲種商船学校							
248	富山市	富山大学	2005	(統合)							
249	同		1975	富山医科薬科大学							
250	同	富山大学	1949		1964	菊池 靖雄	高岡市戸出	高教頭歴任・富山女短大教授	森川 勝彦	庄川町	東京火災海上保険・公募1位
251	同	人文学部	1949								
252	同		1924	富山高等学校	第一	相馬 御風	新.糸魚川市	詩人・「春よこい」「早大校歌」	小松 耕輔	秋田県	作曲家・学習院大教授
253	同				第二	渡辺 年応				小松 耕輔	秋田県
254	同	人間発達科学	2005								
255	同		1949	教育学部							
256	同		1943	富山師範学校	1923	古屋 利之	石.川北村	歌人・富山師範・石川師範教員	荒木 得三	城端町	富山師範教諭・県下音楽界に貢献
257	同		1893	県立師範学校							
258	同		1875	新川県師範学校							
259	同		1873	新川県講習所							
260	同	経済学部	1949								
261	高岡市		1924	高岡高等商業学校	1929	相馬 御風	新.糸魚川市	詩人・「春よこい」「早大校歌」	弘田龍太郎	高知県	作曲家・「叱られて」「春よこい」
262	富山市	工学部	1949								
263	高岡市		1944	高岡高等商業学校							

No.	市町村名	現学校名	開校	旧学校名	制定	作詞者	出身地	経歴	作曲者	出身地	経歴
264	富山市	薬学部	2005	(統合)							
265	同		1975	(富山医薬大に移管)							
266	同		1949	薬学部							
267	同		1910	県立薬業専門学校		相馬 御風	新.糸魚川市	詩人・「春よこい」「早大校歌」	小林 礼		
268	同		1893	私立共立薬学校							
269	同	芸術文化	2005								
270	高岡市		1986	高岡短期大学							
271	射水市	富山県立大	1990								
272	同		1972	県立技術短期大学							
273	同		1962	県立大谷技術短大	1966	豊本 義治	高岡市	在学時公募1位	花井吉三郎	東京都	帝国音楽学校教授・高岡高教諭
274	高岡市	高岡法科大学	1989								
275	富山市	富山国際大学	1990		1964	大島 文雄	富. 覚中町	富大名誉教授・富山市教育委員長	石桁真礼生	和歌山県	作曲家・石桁冬樹は子
276	同	富山短期大学	2000								
277	同		1963	富山女子短期大学							
278	高岡市	保育専門学校	1955		1960	大島 文雄	富. 覚中町	富大名誉教授・富山市教育委員長	松本民之助	京都市	作曲家・松本清富大教授は子
279	魚津市	高等職業訓練校			1971	池本 正二			小澤 達三		
280	富山市	富山視覚総合支援	2010	(改称)	1951	館井文次郎			大間知千津恵		
281	同		1948	盲学校(改組)							
282	同		1932	県立盲啞学校							
283	同		1931	私立盲啞学校							
284	同		1907	私立富山訓盲院							
285	同	富山聴覚総合支援	2010	(改称)	1996	作成委員会			高道恵美子		

No.	市町村名	現学校名	開校	旧学校名	制定	作詞者	出身地	経歴	作曲者	出身地	経歴
286	富山市		1965	富山ろう学校(改称)	1996	作成委員会			高道恵美子		
287	同		1948	富山聾学校(改組)							
288	同		1932	県立盲啞学校							
289	同		1931	私立盲啞学校							
290	高岡市	高岡聴覚総合支援	2010	(改称)	1989	筏井 弘			大澤 欽治	庄川町	富山大教育学部長・名誉教授
291	同		1965	高岡ろう学校							
292	同		1954	ろう学校高岡分校							
293	黒部市	にいかわ総合支援	2010	(改称)	2000	にいかわ養護			西野 茂	滑川市	にいかわ養護学校教諭・在職時
294	同		1983	にいかわ養護学校							
295	同		1979	しらとり養護分校							
296	富.旧婦中町	しらとり支援	2010	(改称)	1978	国香 正道	黒部市	富山県教育委員長	池田 祐孝	富山市	富山アカデミー女声合唱団指揮者
297	同		1997	しらとり養護学校							
298	高岡市	高岡支援学校	2010	(改称)	1969	高岡養護学校			高岡養護学校		
299	同		1965	高岡養護学校							
300	砺波市	となみ総合支援	2010	(改称)	1983	となみ養護			大澤 欽治	庄川町	富山大教育学部長・名誉教授
301	同		1982	となみ養護学校							
302	同	となみ東支援学校	2010	(改称)	1983	星野 正夫			根井 尚一		元庄川中学校教諭
303	同	となみ学園分校	1982	(となみ養護の分校)							
304	同	砺波学園分校	1976	(高岡養護の分校)							
305	富山市	富山総合支援	2010	(改称)	1968	大島 文雄	富. 覚中町	富大名誉教授・富山市教育委員長	黒坂 富治	朝日町泊	富山大名誉教授
306	同		1966	富山養護学校							
307	同	高志支援学校	2010	(改称)	1978	高志養護学校			赤星 建彦		作曲家・日劇小劇場音楽監督

No.	市町村名	現学校名	開校	旧学校名	制定	作詞者	出身地	経歴	作曲者	出身地	経歴
308	富山市		1975	高志養護学校	1978	高志養護学校			赤星 建彦		作曲家・日劇小劇場音楽監督
309	同		1968	富山養護高志分校							
310	同	ふるさと支援	2010	(改称)	1978	石上 利隆			渡辺 節保		作曲家
311	同		1974	ふるさと養護学校							
312	同	富山高等支援学校	2013	(大沢野工跡に開校)	2014	同 校			高原 兄	富山市	作曲家
313	高岡市	高岡高等支援学校	2013	(二上工跡地に開校)		海苔 由宏		初代校長在職時	浅井 暁子	静岡県	金沢大准教授・作曲家
314	同	こまどり支援	2010		1969	大島 文雄	富. 覚中町	富大名誉教授・富山市教育委員長	室崎 琴月	高岡市	作曲家・中央音楽院設立・「夕日」
315	同		1968	高岡市立こまどり養護							